

田舎暮らしの

交流居住の先進自治体事例集


ススメ

生まれる場所は

選べないけれど、

暮らす場所は

“わたし”が選ぶ。



少年時代、山を元気に駆け回り、川で飽きるほど泳ぐ。
見渡せば、青々とした田んぼに、優雅に空を飛ぶとんぼ。
こういう土地に生まれ育った人も、そうでなかった人も、
日本の古き良き「原風景」として、憧れを持っていたりする。

一方、都市での生活は、不満はあっても確かに便利だ。
好きな外国映画は、すぐ隣の街に行けば上映されているし
家で料理を作らなくても、夜遅くまで開いているお店はたくさんある。
だから、都市をすぐに離れることは、正直難しい。

都市生活の便利さと、田舎暮らしの心地よさ。
叶うならば、その両方を手に入れたい……。

いまこの国では、新しい暮らし方が登場しつつある。
旅行者として訪れる観光でもなく、移住者として根を下ろす定住でもなく、
都市の生活を営みながら、憧れていた原風景を行き来し
そこにいる人や文化と交流するというライフスタイル、「交流居住」。
生まれる場所を選ぶことはできなくても、暮らす場所は自分で選ぶことができる。
それは、第二の故郷を持つということであり、
都市生活を送る自分の人生と並行していく、もう一つの人生の物語。
心の引き出しにしまっていた懐かしき風景とその暮らしを、いま、はじめる。

田舎暮らしのススメ

もう一つの物語を、
はじめよう。

「交流居住」の推進

総務省では、「交流居住＝交流を主たる目的として田舎と都市を行き来するライフスタイル」を提案し、田舎暮らしを求める皆さんのニーズに応えるとともに、地域間交流により過疎地域をはじめとする地方の活性化を支援しています。交流居住と言いましても、田舎暮らしのスタイルは幅広く、P5にあるように「ちょこっと」「のんびり」「ど

っぷり」「行ったり来たり」「田舎で学んでお手伝い」など様々なパターンがあります。

平成16年度の総務省調査において都市にお住まいの方々に對するアンケートを実施したところ、交流居住に興味を持っている方は2007年から定年を迎える団塊の世代を中心に、3割程度いることがわかりました。また、目的としては、「景色や環境がい

い」「静かにのんびりと過ごしたい」「アウトレジャー」「家庭菜園やガーデニング」など、自然溢れる「ふるさと回帰」への想いを強く持っている人が多いことがわかりました。さらに、受け入れ先の地方自治体に対しては「交流居住に関する情報発信」を望む声が多いこともわかりました。

以上のようなことから、平成

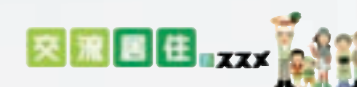
18年7月に交流居住ポータルサイト『交流居住のススメ——全国田舎暮らしガイド——』を開設し、インターネットを通じて、全国各地の地方自治体についての交流居住に関する様々な情報（地方自治体における生活関連情報や滞在施設、体験プログラムなどの情報、田舎暮らしのノウハウ）を提供しているところ

です。また、都市住民の皆様が、各地方自治体の担当職員と直接相談のできる場も設けています（平成18年度は10月14日（土）に、ふるさと回帰フェア2006の中で「自治体相談コーナー」を開催します）。

本誌についても、交流居住に積極的に取り組む地方自治体の活動内容や実践者の生の声をお伝えすることによって、これから

交流居住をはじめようとする際の一助となることを願って作成いたしましたので、皆さんにご活用いただければ幸いです。

総務省自治行政局過疎対策室



<http://kouryu-kyojunet/index.php>



交流居住のタイプ

総務省自治行政局過疎対策室では、交流居住の目的や都会と田舎とを来訪する頻度、あるいは、田舎での滞在期間等を踏まえて、交流居住のタイプを5つに分類している。

type A `ちょこっと、田舎暮らし`——[短期滞在型]

目的	田舎ならではの生活体験や自然体験、地元の人たちとの交流等
来訪頻度・滞在期間	特定の田舎を年に数回、あるいは毎年繰り返し訪れる。(1回当たりの滞在期間は1~3泊程度)
滞在居住施設	ホテル、旅館、民宿など
イメージ	ハイキングやスキー等の自然探勝・スポーツ、田植えや稲刈り、果樹収穫等の農業体験、お祭りや年中行事などの生活文化体験を楽しむ生活

type B `のんびり、田舎暮らし`——[長期滞在型]

目的	都会の喧騒とストレスから離れて、環境のよいところでゆっくり休むなど、静養・病気療養、避暑、避寒
来訪頻度・滞在期間	滞在期間が1・2週間~3ヶ月程度と長く、行き来する頻度はあまり高くない(年1~数回程度)
滞在居住施設	セカンドハウス、貸別荘など
イメージ	貸別荘を夏や冬に1ヶ月程度借りて滞在する生活

type C `どっぷり、田舎暮らし`——[ほぼ定住型]

目的	仕事場も生活の場も田舎に置き、用事があれば時々都会の住居(こちらがセカンドハウス)を利用する
来訪頻度・滞在期間	都会の滞在時間よりも田舎での滞在時間が長い
滞在居住施設	戸建て住宅、リゾートマンション等(いずれも賃貸含む)
イメージ	田舎の家でホームページの制作や翻訳、執筆活動などの仕事をし、打ち合わせなどで都会に出かける生活。あるいは退職金で田舎に住宅を構え、年に数回、都会の家に暮らす生活

type D `行ったり来たり、田舎暮らし`——[往來型]

目的	仕事や教育など日常生活は都会で行いながら、余暇時間の多くを田舎で過ごす
来訪頻度・滞在期間	週末毎~月1回程度の頻度で都会と田舎を行き来する。(1回の滞在日数は2~3日程度)
滞在居住施設	セカンドハウス、貸別荘、クラインガルテンなど
イメージ	都会では集合住宅に住み、田舎に所有するセカンドハウスに金曜の夜から車で出かけ、土日は田舎での暮らしを楽しみ、日曜の夜に都会に戻る生活

type E 田舎で学んでお手伝い——[研修・田舎支援型]

目的	田舎ならではの仕事や技術の習得、あるいは援農や森林保全、自然環境保全などに関わる活動への参加を目的とする
来訪頻度・滞在期間	一定の長期期間(1週間~数ヶ月)
滞在居住施設	寮や研修施設、社宅など
イメージ	農林業等の期間雇用や農業技術研修、染色や織物等伝統技術習得のための弟子入りなどで、学び働きながら田舎に住む生活

目次

01 田舎暮らしのススメ

もう一つの物語を、はじめよう。

07 特集1

私の田舎暮らし「物語」

仲間と将来の畑を耕す。(長野県・飯山市)
畑を耕し、野菜を育み、時間を実らせる。(宮城県・丸森町)
育てる尊さ、届ける喜び。(新潟県・十日町市)
`毎日がGW、な生活の先にあるもの(鳥根県・江津市)

15 特集2

ようこそ、我が町へ

北海道/北海道 社警町/北海道 由仁町/青森県 南部町/宮城県 丸森町/
山形県 白鷹町/福島県 川俣町/福島県 泉崎村/群馬県 川場村/
千葉県 NPO法人千葉自然学校/新潟県 上越市・十日町市/新潟県 魚沼市/
山梨県 北杜市/長野県 飯田市/長野県 飯山市/愛知県 豊根村/
京都府 福知山市/京都府 南丹市/兵庫県 朝来市/奈良県 川上村/
鳥取県 智頭町/鳥根県 (財)ふるさと鳥根定住財団/鳥根県 江津市/
徳島県 美波町伊座利/高知県 四万十市/大分県 宇佐市安心院町/
大分県 由布市湯布院町/宮崎県 西米良村/沖縄県 東村

78 受け入れ窓口一覧

◎居住タイプでお探しの方はこちらから…

type A `ちょこっと、田舎暮らし` [短期滞在型]
17, 19, 21, 23, 25, 27, 29, 31, 33, 35, 39, 41, 43,
45, 47, 49, 59, 61, 63, 65, 67, 69, 71, 73, 75

type B `のんびり、田舎暮らし` [長期滞在型]
17, 23, 25, 47, 59, 61, 65, 67

type C `どっぷり、田舎暮らし` [ほぼ定住型]
17, 19, 21, 27, 31, 43, 45, 49, 51, 53, 57, 71

type D `行ったり来たり、田舎暮らし` [往來型]
17, 37, 55

type E 田舎で学んでお手伝い [研修・田舎支援型]
17, 29, 35, 37, 41, 63, 69, 73, 75

編集…ASOBOT / レイアウト…文京圖案室
写真…有賀 傑(表紙, 02-05, 07-10, 12, 47) / 金子 睦(13-14, 63)

特集1 私の 田舎暮らし 「物語」

「田舎暮らし」を始めるのに、決まった理由はない。
都市の喧騒を忘れたい人もいるし
旅先での楽しい思い出がきっかけになった人もいる。
子どもの頃からの夢だった人もいるかもしれない。
人生の数ほどに、その「物語」は始まっている。



左から2番目が折井さん、3番目が内藤さん



初夏の週末、畑の周りで2人の男性が草刈り機を使っている。機械のエンジン音と草を刈る音が周囲に響き渡る。畑の周囲の雑草は小動物の隠れ家になったり、害虫の温床になったりする。農業には様々な仕事があるが、田や畑の草刈りは欠かせない。2人の男性は今まで使ったことのない機械に悪戦苦闘している。通常、「体験農園」的なイベントの場合、主催者は参加者の怪我を心配し危険な作業はやらせない。転んだり、気を抜くと大きな事故に繋がる。その2人の姿をじっと見ている人がある。この『百姓塾』を運営している飯山市観光係の高橋昇一さんだ。彼らの作業をじっと見ながら、「大変だとは思いますが…。しんどい体験もやってもらわないとね。憧れだけで住まれば、住んだ後、みなさんが困りますから」。汗をぬぐいながら高橋さんは言った。

飯山市で行われた、この1泊2日の『百姓塾』では、市や農協の職員が百姓の仕事に参加者に教える。参加者たちも「将来的に農を仕事として行きたい」と考える人たちが多く、『百姓塾』では種付けから、管理、収穫と農作業の流れを知り、体験することができる。

参加者の一人、東京都で公務員として働く内藤正巳さんがようやく草刈り

作業を終えた。額には大粒の汗が光る。「手に職を持つというのが夢でした。勤め人ですから、なかなかそういう機会がなくて。だから、農業には昔から憧れがありました」。

今回の『百姓塾』は全7回のうちの2回目。前回の講座では畑の植え付けと、田植えを行った。田には水が行き渡り、稲は元気そうに空に向かって伸びている。じゃがいも、大豆、さつまいもを植えた畑でもきれいな緑の葉が見えた。美しい空気と豊富な水、豊かな土壌のなかで野菜がすくすくと元気に育っているのがわかる。機械で切ることができない雑草は手で抜いていく。これもなかなか重労働だ。作業が一段落したら、次回の『百姓塾』で収穫ができるように、ハツカダイコンやラディッシュなどの種を植える。もう一人の参加者、折井進吾さんは手際よく作業をこなしている。農作業経験があるのかと問うと「土いじりが好きなんですよ。土日は団地の畑で作業していますから」。折井さんはタオルで汗をぬぐう。つくづく、農作業とは大変な仕事だと思う。昨今、雑誌やテレビでは「田舎暮らし」を特集するものが多い。しかし、高橋さんの言うように「憧れ」だけでは、うまくいくはずがない。農業とは地道な作業の積み重ねなのだ。

飯山市はスキーや温泉など観光資源に恵まれた土地だ。付近には民宿やホテルが多く、よその土地からの人と接する機会も多い。参加者たちも冬場はスキー客の泊まる民宿に滞在している。農作業が終わると、いったん民宿へ戻り風呂の支度をして温泉へ行く。農作業の後にゆっくり温泉につかると、参加者たちの顔からも自然と笑みが浮かんでくる。宿では民宿の女将さん手作りの山菜の天ぷら、畑で採れた野菜が並ぶ。すべて、地元で採れた物なのだという。飯山は世界屈指の豪雪地帯として知られている。冬場の雪は春には豊富な水となり飯山の田畑を潤す。その水と農家の人々がおいしい野菜を作り出す。

翌朝、飯山の名物「笹餅」を作るため、山に入り笹を持ち帰る。石臼にほっかほかに蒸した餅米を入れ、かけ声と共につく。「よいしょ！よいしょ！」。都会ではもう見ることもなくなった餅つきの光景。田植えが終わり、一段落がついたところで抗菌作用がある笹の葉で餅をくるみ保存食として置いておくのだそう。笹餅も含めて、飯山の暮らしです。高橋さんはいう。『百姓塾』ではこんな風にして、ゆっくりゆっくりと仕事と飯山での暮らしをおぼえていく。



私の田舎暮らし「物語」
type A — 短期滞在型
「ちょこっと、田舎暮らし」

仲間と将来の畑を耕す。

折井進吾さん(69歳)東京都町田市在住、内藤正巳さん(40歳)神奈川県大和市在住



私の田舎暮らし「物語」

type D —— 往來型

〝行ったり来たり、
田舎暮らし

宮城県丸森町
みやぎけん・まるもりまち

畑を耕し、野菜を育み、 時間を実らせる。

秦野義一さん(70歳)、とき子さん(62歳) 東京都大田区在住

秦野とき子さんは、田園風景が広がる緑美しい丸森町の出身。22歳のとき、東京でご主人の義一さんと職場結婚して以来、ずっと東京都大田区で暮らしてきた。宮城県丸森町との往來をはじめたのは7年前。とき子さんの弟さんから、滞在型市民農園『不動尊クライנגルテン』の存在を教えられたのがきっかけだった。東京暮らしが長いものの、やはり地元には家族がいるし、友人も多い。帰ってきたときは方言になり、どこの場所とも代え難い安らぎがあった。そんな故郷への愛が、地元での田舎暮らしへ少しずつ向かわせた。

一方、義一さんは生まれも育ちも東京都。仕事は精密機械専門の職人として、飛行機やカメラのフィルター、自動車のゲージを作り続けた。しかし、たびたび丸森町を訪れ、自然に触れていた義一さんは、定年後、畑仕事をやってみることに興味を抱いていた。そこに、とき子さんの弟さんからの話が舞込んだ。

「最初は、妻の実家ということが大きかったんだけど、畑仕事はやってみたいだったんです。畑仕事の経験はまったくなかったけど、妻の家族や町の人に教えてもらえるから、言い出した妻より先に退職した僕が、東京都とこっち

の行き来をはじめたんです」

二週間丸森町で過ごして、車で7時間かけて東京へ帰ってまた二週間。そんな生活を義一さんは7年続けている。義一さんより7歳年下のとき子さんは3年前に仕事を辞め、丸森町と東京の往復がはじまった。

「以前のお父さんは、部屋にどんと座って何もしない人だったから、行き来するようになって自分で料理しているのを見てびっくりしました。畑作業を教わっても方言が分からないから、見よう見まねでやるしかない。でも、1年目からじゃがいもやカボチャが実をつけたから、よくもまあ箸にも棒にもかからない人が、がんばっているなと思いましたね(笑)」

畑仕事は未経験でも簡単にできるというわけではない。義一さんの「好奇心」と「楽しい、という想いが、長い移動ももろともせず、豊かな野菜を実らせる。「東京の方が友達もいるし、年中遊んで暮らせるから」と言いつつ、ひとしきり話してから「ここが一番いいんだよな。山が目の前にあるし」と本音をこぼした。

義一さんが東京と丸森で最も違いを感じるの、景観もあるのだが、一番は空気。空気が違うと夏の暑さも冬の寒さも違ってくる。二週間毎に7時間

の移動ができてしまうのは、東京の喧騒から抜け出して、山の澄んだ空気が吸えるからかもしれない。頭ではなく、身体が欲するようになっている。かといって、東京での暮らしもそれはそれで好きなのだ。

丸森町で育てた野菜は、ご夫婦ですべて食べるでもなく、売るわけでもなく、東京のご近所におすそわけするのだという。

「一口でいいから私の丸森でできた野菜をみなさんに味わってもらいたいです。とっとも喜んでくれますから」

丸森町にとき子さんの実家があるにもかかわらず、あえて休憩施設付き農園『不動尊クライングルテン』を借り、小さいけれど自分たちで畑を耕し、いくつかの野菜を育てている。7年以上続けてきた丸森町と東京の往來を二人は「これからもできる限り続けていきたい」と口を揃えた。そこには、清々しい空気やおいしい野菜のほかに、二人で過ごす豊かな時間が待っている。

とき子さんの郷土愛と義一さんの自然への愛。ご夫婦の丸森への違った想いが、行き来をはじめた年に亡くなった、とき子さんのお父さんが植えたじゃがいもやネギなどの野菜を、今年も実らせている。





世田谷区中町に『自然食の健康食卓』という名のお店がある。これはNPO法人環境デザインセンター『せたがや棚田倶楽部』代表の増子隆子さんがオーナーを務める、無農薬・無化学肥料・無添加の食材・自然食品を取り扱うお店だ。店内には、新潟県松代町で貸民家を経営する若井明夫さんが丹精込めて作った、みらい納豆やどぶろくの販売を始め、マクロビオティックの創始会社オーサワの自然食品、そして店長の金野とよ子さんの手づくり日替わり弁当など、豊かな食材が並ぶ。そもそも『自然食の健康食卓』がオープンするに至った経緯は、増子さんと新潟県十日町市松代（旧松代町）の交流にあった。

もともと環境問題について取り組む仕事をしてきた増子さんは、日々の生活の中で食の安全性への危機感を募らせていた。「今の異常な生活環境に対して『何か行動しなくては。』と、食の安全を確保するため、日本人の食の柱と言えるお米と大豆を自分たちの手で作ることから始めようと、『せたがや棚田倶楽部』を設立。本格的に米づくりができる土地を探し始めていた頃、以前より松代町と親交のあった『世田谷アドベンチャークラブ』を主催する川本茂さんから「それだったら絶対に新潟県の松代町を訪れるといい」と勧められ、松代町役場を訪れた。「まず澄んだ空気の気持ち良いこと。また、突然訪れた私に対して『ようこそ来て下さいました。』と役場の方々が笑顔で対応して下さいましたことに感謝しました」。早速、相談を持ちかけ、素人が果たしてできるものなのだろうかという想いを抱えながらも、「無農薬」であること、そして化学肥料を使わない米づくりをしたいと伝えた。そうした条件であればと若井明夫さんの名が挙がり、若井さんも快く承諾。2枚の田んぼ約1反5畝のスペースを借りて、念願の米づくりが始まった。

「ここででの体験は、私たち都会暮らしの人間が忘れていたもの、捨て去っていたものを発見する『旅、でもありません。美しい棚田、水、空気、美味しいお米、大豆、野菜、そして町の人々の温かい気持ち…。加えて田んぼでの、今まで体験したことのない全身の労働。私たちににとっては決して楽ではないけれど、いい米ができるならと、疲れは心地良いものでした」と増子さんは当時を振り返る。

こうして定期的に松代町へ訪れる度に、増子さんや『せたがや棚田倶楽部』のメンバーのなかに「都市に住む人々にも真に安全な食を届けたい。知ってもらいたい」という新たな想いが芽生える。そんなみんなの想いが一つの

形となり生まれたのが、平成16年12月19日にオープンした『自然食の健康食卓』だった。

「松代町で若井さんのお母さんが作ってくださった食事をイメージして作っています。それは肉も魚も出てこなくて数種類の飾り気のない、伝統的な農家の食事なんですけど、それがまた美味しいんです。『松代の人達は、毎日こんな美味しい物を食べているの！。って羨ましくなって（笑）』と、金野さん。松代町で収穫された野菜やお米が健康に優しいお弁当となって、訪れる人々に届けられている。

「最初は年に5、6回程度、松代に通うつもりが、今では1ヶ月に1度以上のペースで田んぼを見に行っています。成長過程が気になって仕方ないですよ。若井さんにも『こんなに通ってくれるとは予想もしていなかったですよ。と笑われてしまいました。これから味噌作りも本格的に始まります』と増子さんは夢を膨らませている。

最初は、日本人が口にしている食の安全性に対する危機感から始めた米づくり。けれど、今はその想いにプラスして、自分たちで育てる喜びを感じたいからこそ、農業と向き合っている。自分たちの力でできる範囲の活動が、少しずつ豊かな食生活に変わると信じ、これからも続けていくつもりだ。

育てる尊さ、届ける喜び。

増子隆子さん、金野とよ子さん、川本茂さん 東京都世田谷区在住

私の田舎暮らし「物語」
type D —— 往來型
『行ったり来たり、
田舎暮らし』



左から川本さん、増子さん、金野さん





深い緑の山を望みながら、若々しく悠々と葉を伸ばす桑の木。鳥根県江津市桜江町は、かつて養蚕業が栄えていた時期には、広大な桑畑が一面に広がっていた。桑の葉を育てた肥沃な土壌は、今も健在だ。自然があるままの姿で残る桜江町に、福岡市で生まれ育ち、旅行業に携わっていた古野俊彦さんが訪れたのは、平成8年のことだった。

「ずっと福岡にいた家内も私も、アウトドア好きが高じて、老後は田舎暮らしというのが共通の考えだったんです。20年近く、漠然と「どこがいいかな、ってあちこち遊び半分で行ったりしていた。そんな時に、ネットで桜江町にある施設『風の国』の情報を入手して、お邪魔したのがきっかけでした」

町の中央に流れる雄大な江ノ川や、20分足らずで日本海へ行ける立地、そしてIターン者に対して積極的だった桜江町を、純粋に「いいなあ」と思ったという。

「田舎暮らしへの想いはベースにあったから、どこに定住するかはきっかけですよね。当時51歳だったけど、田舎で暮らすなら元気なうちの方がお友達もできるし田舎に馴染めるとも思った。飛び込んだらどんどん前に進んでいく私の性格もあり、個人園芸をされている方の所へ見習いで入ったり、江ノ川での海老の漁の指導をしていただいた

り…。もう毎日遊んで、楽しくてね。最初の1年は、毎日がGWみたいな生活(笑)」

地元の方から技術を教わり、声が掛かれば手伝いに出向き、そうしているうちに地元で溶け込んでいった。それは半年後に桜江町へ越してきた妻・房子さんにも共通している。

「私、人が大好きなの。だから田舎での生活、例えば花についての事とか、分からない事があると「それは何!？」と、すぐに聞いてっちゃうのよ」と、大らかな笑顔で話す。

田舎暮らしは、確かに豊かな自然に囲まれ、美味しい空気と水と食べ物がある。しかし、生活するにはそれ以上の認識が必要になる。「こちらの方が大切にしている価値観や心情を、初めの頃理解できないのは当然。でも「段々と理解していこう、という姿勢は大切だと思うんです。そうすれば、お互いに早く打ち解けられる」。

古野さんご夫妻は、その事を大切にしつつ、新たに事業を興した。それは、桜江町の特産であった「桑」を生産し特産品として広めること。『桜江町桑茶生産組合』を平成10年に立ち上げ、現在は大自然の中で桑の葉を丹念に育て、桑茶をはじめ、桑の葉から造る糖やミツ、塩、ジャムなどを生産している。

「都市部で育ってきた私たちは、消費

者としての経験は持っている。こちらは生産者としての経験がある。本当の自然が残っているこの地の、特産品を都市部に紹介したいと思ったんです。こちらの御年配の方は、桑を育てた経験がお有りになる。私だけが経験ない。変な会社でしょ(笑)。地元の方に教えていただきながら生産していく。そして、販売や流通は私がやる。それしか、私はできないから」

そう謙遜するが、今では、『しまね定住財団』がサポートする産業体験の受け入れ側になっており、実際会社には地元の人をはじめ多くのUIターン者が働いている。「田舎暮らしで生計を立てる、という課題の打開策にまで、古野さんの目は向けられているようだ。

妻・房子さんも俊彦さんの事業を手伝いながら、田舎暮らしを心から楽しんでいる。

「季節で山の色が変わるでしょ？ それに花や山菜も多いのよ。「つくしんぼがこんなに！ てんぶらにしたら美味しいのよね、って感動しちゃう。地元の人には山菜なんて見慣れているから、呆れてるけど(笑)」

「毎日がGWのようだった」という田舎暮らしスタートの日々を経て事業を成功させた今もなお、桜江町での暮らしを心から楽しんでいる。それは、古野夫妻の健やかで朗らかな笑顔から、伝わってきた。



私の田舎暮らし「物語」

type C — ほぼ定住型
「どっぷり、田舎暮らし」



「毎日がGW、な生活の先にあるもの」

古野俊彦さん(61歳)、房子さん(56歳) 江津市桜江町在住(福岡市よりIターン)

ようこそ、我が町へ

- 01 北海道 —17
- 02 北海道 壮瞥町 —19
- 03 北海道 由仁町 —21
- 04 青森県 南部町 —23
- 05 宮城県 丸森町 —25
- 06 山形県 白鷹町 —27
- 07 福島県 川俣町 —29
- 08 福島県 泉崎村 —31
- 09 群馬県 川場村 —33
- 10 千葉県 NPO法人千葉自然学校 —35
- 11 新潟県 上越市・十日町市 —37
- 12 新潟県 柏崎市高柳町 —39
- 13 新潟県 魚沼市 —41
- 14 山梨県 北杜市 —43
- 15 長野県 飯田市 —45
- 16 長野県 飯山市 —47
- 17 愛知県 豊根村 —49
- 18 京都府 福知山市 —51
- 19 京都府 南丹市 —53
- 20 兵庫県 朝来市 —55
- 21 奈良県 川上村 —57
- 22 鳥取県 智頭町 —59
- 23 島根県 (財)ふるさと島根定住財団 —61
- 24 島根県 江津市 —63
- 25 徳島県 美波町伊座利 —65
- 26 高知県 四万十市 —67
- 27 大分県 宇佐市安心院町 —69
- 28 大分県 由布市湯布院町 —71
- 29 宮崎県 西米良村 —73
- 30 沖縄県 東村 —75



01



02



03



04



05



06



07



08



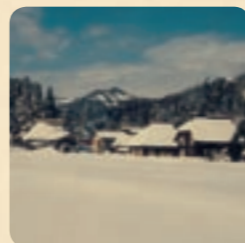
09



10



11



12



13



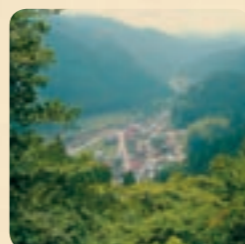
14



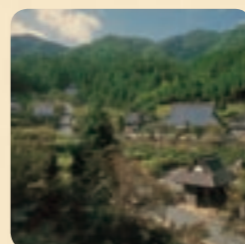
15



16



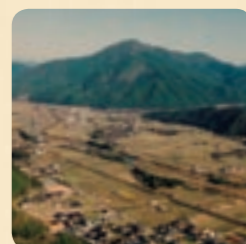
17



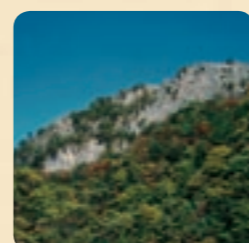
18



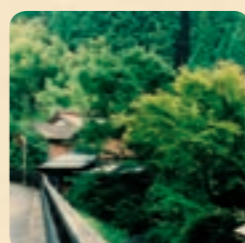
19



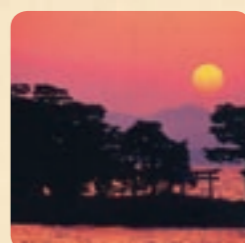
20



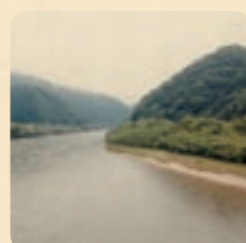
21



22



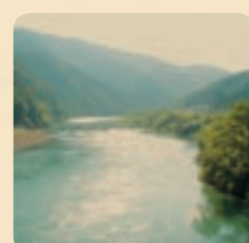
23



24



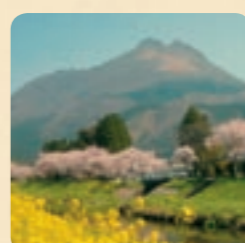
25



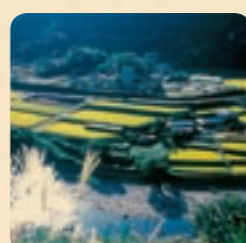
26



27



28



29



30



01

「大交流時代」を目指すフロンティア 北海道

ほっかいどう

日本列島の北端にある北海道は、古くは蝦夷地と呼ばれていた。開拓使が設置され、「北海道」と改称されたのが明治2年。以来この雄大な北の地は、全国から入植してくる開拓者の手によって切り開かれてきた。つまり、140年に渡る開拓の歴史は、すなわち移住者を受け入れてきた歴史であり、ある意味「交流」の歴史だともいえるだろう。

そんな背景を持つ北海道が、退職を間近に控えた団塊の世代に向け、「ちょっと暮らし」を通じて「第二のふるさと探し」を提案するプロジェクト『北

のふるさとへ。移住計画。』に乗り出した。

「広い大地と海、山、川、豊かな自然に都市もある——北海道はまさに「何でもある、ところ」です。定住だけでなく、「好きなときに、好きな場所で、好きなことをする、という発想で、シーズンステイをするのにも絶好の土地ですよ」と語るのは、プロジェクトの発案者である道知事政策部主幹の大山慎介さん。

「道内には180の市町村がある。それらが個別に交流事業を展開しても、宣伝力には限界がある。しかしみんなで手

をつなぎ、『オール北海道』でアピールすれば、相乗効果が生み出せる」というのがプロジェクトの大きな趣旨だ。まずはオール北海道に興味を持ってもらい、そこからニーズに合わせて市町村を選べるシステムを作ろうと呼びかけている。

平成16年、団塊の世代約1万人に行ったアンケートで、「約8割が北海道移住に関心を持っている」との結果が出た。それを受けて平成17、18年を集中取組期間とし、首都圏に向けてオール北海道のプロモーション活動を行うほか、移住体験ツアーなどを実施。参

「交流居住」施策の概要

平成17、18年を集中取組期間とし、移住促進事業を積極的に展開している。首都圏で開催される物産展などのイベント会場で、団塊の世代向けに「オール北海道」の魅力をPRするほか、メールマガジンで道内各地の交流情報を発信。志を同じくする登録市町村を募り、ホームページによる移住情報の公開とワンストップ窓口を設置、平成17年度には短期・長期滞在の移住体験ツアーを実施するなど、受け入れサイドの体制整備にも努めている。

目的別滞在タイプ

type A-E

多彩な田舎暮らしを総合サポート 『北海道コンシェルジュ』



北海道庁が実施しているプロジェクトの一環として、交流居住に関し、オール北海道としての総合窓口機能を試行的に実施している民間組織。平成18年7月から、移住を考えている方々への情報提供や相談に応じる窓口業務(無料)をモ

デル的にスタートさせた。「北海道暮らし」に興味を持つ人の目的や希望に合わせ、移住相談ワンストップ窓口を設けた『登録市町村』などから最適な受け入れ先などを迅速に紹介できるよう、現在システムを構築中。



●登録市町村(平成18年6月現在・88市町村)

《石狩支庁》千歳市、恵庭市、石狩市、当別町、新篠津村、《渡島支庁》函館市、知内町、七飯町、森町、八雲町、長万部町、鹿部町、《檜山支庁》江差町、今金町、厚沢部町、《後志支庁》小樽市、黒松内町、《空知支庁》美瑛市、三笠市、砂川市、深川市、南幌町、由仁町、栗山町、月形町、沼田町、滝川市、長沼町、《上川支庁》旭川市、士別市、富良野市、鷹栖町、当麻町、比布町、東川町、上富良野町、南富良野町、和寒町、剣淵町、美深町、音威子府町、中川町、名寄市、東神楽町、《留萌支庁》増毛町、《宗谷支庁》中頓別町、《網走支庁》網走市、紋別市、美幌町、遠軽町、上湧別町、滝上町、佐呂間町、清里町、北見市、津別町、大空町、湧別町、《胆振支庁》室蘭市、苫小牧市、伊達市、壮瞥町、安平町、白老町、豊浦町、登別市、厚真町、《日高支庁》浦河町、様似町、新ひだか町、新冠町、《十勝支庁》音更町、上士幌町、鹿追町、新得町、芽室町、更別村、大樹町、池田町、本別町、陸別町、広尾町、清水町、《釧路支庁》釧路市、標茶町、弟子屈町、《根室支庁》別海町、中標津町

加者の意見を反映させながら、地域における受け入れ体制の整備も進めている。

「平成18年6月現在、呼びかけに応じて、地域の移住情報を発信するための専用ホームページを開設した『登録市町村』は88。今後も増える見込みです。それらの市町村には必ず、問い合わせをたらい回しにしないよう、移住相談の『ワンストップ窓口』を設けてもらっています」と、道知事政策部主幹の水戸部裕さんは話す。「ゆくゆくは総合的なコーディネートを民間組織が担うのが理想」と、現在、民間組織を主

体に、オール北海道としての移住コンシェルジュ(総合窓口)のモデル作りを進めている。

一方、大山さんが思い描く交流ビジョンは、実はさらにスケールが大きい。「近い将来、首都圏以外にも働きかけをしたいと思っています。たとえばある人は「夏は北海道で過ごし、冬は九州で暮らす」、ある人はその逆というふうに、日本全国で人々がスクランブルできるような『大交流時代』を目指し、ムーブメントを起こしたいですね。そのことが北海道を元気付けるし、日本の中での新たな役割だとも考えてい

ます」

「交流歴140年」のフロンティア——北海道にいま、新しい時代の芽が育とうとしている。

data
日本の総面積の約22%を占める北端の地方公共団体。14支庁、180市町村がある。気候は冷涼で、変化に富む山脈、広大な温原、天然湖沼など自然が豊富。2005年には知床半島が世界自然遺産に登録された。

●人口…5,629,970人/世帯数…2,580,577世帯(2006年3月31日現在)
●交通…羽田から新千歳空港まで空路で約1時間30分



02

火山と共に生きる町 北海道壮瞥町

ほっかいどう・そうべつちょう

北海道の南西部、日本で3番目に大きなカルデラ湖である洞爺湖のほとりに、壮瞥町はある。支笏洞爺国立公園に抱かれたこの一帯は、温泉や観光果樹園が点在し、例年多くの人を訪れる北海道有数の観光エリアだ。と同時に、壮瞥町のプロフィールを語る時忘れてはならないのが有珠山、昭和新山といった火山の存在。標高737mの有珠山は、過去100年間に4度も噴火した活火山だ。その寄生火山である昭和新山は、標高398mの赤茶けた山からいまでも白い噴気を上げている。「この町の住民は、火山と共生する、

という意識が強いんです。`噴火があるから、温泉などの恩恵もある、という考え方ですね。さらに、火山遺構を資源と捉えて、火口群や噴火の爪跡を『洞爺湖周辺地域エコミュージアム』として保存、公開しています」と話すのは、壮瞥町総務課企画調整係長の 大野博雄さん。交流居住事業の窓口として活躍している大野さんは、「火山の危険と恩恵をじゅうぶん理解した上で移住を決めてほしい」と、町外から視察にやって来る定住希望者を必ずエコミュージアムに案内している。

壮瞥町では昨年まで、短期滞在の移住体験ツアーや、長期滞在中の冬気候を体感できる『昭和新山国際雪合戦ボランティアスタッフ募集事業』を展開していたが、平成18年からは定住希望者に的を絞って、ツアーを廃止して個々に対応するスタイルに切り替えた。「北海道は地理的に首都圏から遠く、往來型の交流は難しい。滞在型の交流には観光の受け皿がすでにある。今後力を入れるべきは移住支援だ」という発想だ。移住受け入れのための民間組織『そうべつ友愛ターンの会』会員であり、

「交流居住」施策の概要

本格的に交流居住事業に乗り出したのは、平成12年の有珠山噴火が一段落した平成13年。移住受け入れのための民間組織『そうべつ友愛ターンの会』と協力し、農業収穫体験を行う2泊3日の『移住体験ツアー』（3回）や、地域のスポーツイベントに参加する6泊7日の『昭和新山国際雪合戦ボランティアスタッフ募集事業』（4回）を実施。参加者からはすでに2組の移住世帯が誕生した。平成18年から個別対応に切り替えて田舎体験を支援。

目的別滞在タイプ

type A `ちよこつと、田舎暮らし

短期滞在型

「短期滞在中で田舎体験がしたい」という人に、町が個別対応で情報を提供。要望に合わせ、宿泊先の手配や土地・空き家の案内をするほか、『洞爺湖周辺地域エコミュージアム』をはじめとする町内各所の1日視察ガイドも行う。

また23戸の果樹園が集まった観光農園村『そうべつくだもの村』では、6~11月上旬にかけて、いちご、さくらんぼ、ぶどう、りんごなどの果物狩りを実施。観光から修学旅行、体験学習まで幅広く日帰り交流を受け入れている。



type C `どっぷり、田舎暮らし

移住支援

移住を希望する人にも町が個別対応で、それぞれの希望に合わせた情報を提供している。たとえば「ある程度長期滞在中で気候風土を体験したい」というような場合、オフシーズンのスキー場ロッジなどを利用し自炊で安く泊まれる『地

域間交流拠点施設』を紹介。さらに、あらかじめ町ホームページで会員登録をした人に空き家情報を配信したり、希望者には民間分譲地のリストを公開したりと、さまざまな形で定住支援を行っている。



体験ツアーの宿泊先として参加者を受け入れた温泉旅館いこい荘の取締役支配人・阿野光弘さんは言う。「北海道は全国からの入植によって開拓された土地です。我々も大多数が移住者の子孫ですから、道外の人でも溶け込みやすいと思いますよ。趣味などをきっかけに、地域のコミュニティにどんどん飛び込んでみてください」美しい湖と温泉があり、気候も穏やかな壮瞥町は、道内の他市町村から移住を考える人も多い。なかには町の事業を経由せず、自力で引っ越しを実現する人もいます。平成17年に隣の伊達市

から移り住み、有機無農薬農業に取り組んで夢の直売所を開いた小山内登さん・栄子さん夫妻は、「農業を通じて地域の人と触れ合い、夢を形にする毎日はとても楽しい。移住はいろいろたいへんだけど、`思えば叶う、ですよ」と笑顔で後続を激励する。条件の合う不動産物件を待っている移住希望者も、すでに複数いるという。昭和新山を仰ぎ見て、火山と共に生きるこの町で、思いを叶える人たちは今後も増えていきそうだ。

data
国指定特別天然記念物の昭和新山や、有珠山、洞爺湖を擁する観光と農業の町。気温は年平均が8.1℃、冬は-2℃程度と、北海道のなかでも比較的温暖。積雪は平坦地で50cm前後。
●人口…3,134人/世帯数…1,418世帯(2006年4月28日現在)
●交通…JR伊達線別駅からバスで約20分、道央自動車道伊達ICから車で約15分



03

ハーブの花が咲き誇る、「ちょうどいい田舎」 北海道由仁町 ほっかいどう・ゆにちょう

な だらかな緑の丘に、可憐なハーブの花が揺れる。由仁町の馬追丘陵に広がる英国風庭園『ゆにガーデン』は、町が推し進める「ハーブのあるまちづくり」の拠点施設として、平成13年にオープンした。その後徐々に知名度が上がり、いまや「由仁町といえば、ゆにガーデン」と言われるほど、この町のイメージを象徴する存在になっている。

北海道の中央部に位置する由仁町は、のどかな田園地帯でありながら、180万都市の道都・札幌から約40km、新千歳空港から約30kmと、アクセスが良好

なのが魅力のひとつ。感覚的には「札幌の郊外」と言ってもいいくらいの立地が幸いし、ゆにガーデンの開園以降は、特に札幌を含む近隣市町村から多くの日帰りレジャー客が訪れる。

「ゆにガーデンのおかげで、ずいぶん地域が活性化しています。ハーブの苗を直売する農家も出てきたし、ハーブ栽培を通じて町外の人と交流する機会が増えたことが、農家の婦人たちの生きがいになっているようですよ」と、由仁町企画課の企画・広報広聴担当主査、納口浩昭さんは語る。

そうした日帰り交流が深まる傍ら、

由仁町では移住も促進しようと、遊休化した農地をまとめて分譲する『優良田園住宅事業』を展開してきた。町主導で宅地開発を進める理由について、納口さんはこう説明する。

「優良農地を保護し、乱開発を防ぐのがひとつです。また、移住者と地域住民とのコミュニティの形成にも気を配りたいですからね」

この事業の大きな特徴は、住宅建設希望者が約1年の間に10回以上も由仁町に集まり、会議を重ねて自ら区画割などを決めていく「コーポラティブ方式」を採用している点。第1期の分譲時

「交流居住」施策の概要

産業とまちづくりを連動させた「ハーブのあるまちづくり」を推進し、日本最大規模の英国風庭園『ゆにガーデン』を平成13年にオープン。周囲には体験農園や天然温泉『ユニの湯』もあり、札幌圏からの日帰りレジャーに人気のエリアとして都市と農村の交流拠点となっている。また平成12年から『優良田園住宅事業』を展開。農地を分譲して田園居住を促進し、積極的に移住者を受け入れることでコミュニティの活性化を図っている。

目的別滞在タイプ

type A 〝ちよこっと、田舎暮らし

日帰り型交流施設

14haの敷地に230種類のハーブと芝生が広がる『ゆにガーデン』が、町のシンボリック的存在として広く親しまれている。12種類のテーマガーデン、インナーガーデン（植物園）、ハーブ料理が味わえるレストラン、苗や地元特産物の直売所な

どを備え、各種ハーブグッズの手作り教室も開催。隣接の体験農園では貸し農園を提供するほか、収穫体験や野菜の直売も実施。『ゆにガーデン』や『ユニの湯』とセットで利用できるお得なプランも提案している。



type C 〝どっぷり、田舎暮らし

優良田園住宅事業

遊休化した農地を町が買い上げ、応募者に抽選で分譲。緑地空間の確保のため一戸当たりの分譲面積は300～600坪と広く、田園風景と調和した景観作りにも配慮している。区画割や環境整備について、住宅建設希望者が集まって会議を

開き、コーディネーターの協力を得ながら決定する「コーポラティブ方式」を採用しているのが大きな特徴。平成12年に第1期の分譲を開始、平成14年には第2期も始まり、平成18年6月現在で計23世帯が定住した。



に札幌から移り住み、広い自家菜園で有機無農薬栽培を始めた菩提寺信昭さんは、「他の移住者とは会議で顔見知りだし、ほぼ一斉に転入しますから、近所づきあいの滑り出しはスムーズ。今後はゆっくり時間をかけ、助け合いながら地域を築いていきたいですね」と話し、妻の紀子さんも「地元の人みんな親切。自分から積極的に交われば温かく歓迎してくれますよ」と晴れやかに笑う。

第1期の募集では全国から145世帯の応募があり、抽選の結果8世帯が定住。第2期の募集でも、100世帯を超え

る応募があった。「移住者が増えれば地域に活気が生まれ、過疎化に不安を抱いている地元の人間も元気になります。近い将来、第3期の分譲も構想していますから、興味のある方は町のホームページを見てください」と納口さん。

由仁町は、都市からもそう遠くない「ちょうどいい田舎」。快適な田園ライフを夢見る人にとって、第3期の分譲は、夢を現実に変える貴重なチャンスといえるかもしれない。

data

北海道のほぼ中央、空知支庁の南部に広がる農村地帯。内陸の割に夏の温度が低く、冬の積雪も少なめで過ごしやすい。道都札幌や空の玄関・新千歳空港、特定重要港湾である苫小牧港とも近い好立地。

●人口…6,617人/2,551世帯（2006年3月31日現在）

●交通…札幌市から車で約1時間、新千歳空港から車で約30分



04

みんなが達者になれる村 青森県南部町

あomoriken・nanbuchou

東北新幹線の終着駅、八戸。そこから車で15分の場所に南部町はある。町の中央を一級河川の馬淵川が流れ、南西には標高615.4mの名久井岳がそびえ立っている。この町は、平成18年1月1日に名川町、南部町、福地村が合併してできた町だ。

しかし、旧名川町から受け継いだ「交流事業」の歴史は古い。県外から大勢の人が訪れる『さくらんぼ狩り』は昭和61年から始まった。

「青森はりんごの名産地ですが、りんご畑の防風林として育てていたのがさくらんぼなんです」とは、南部町農

林課グリーン・ツーリズム推進室の横山悟さん。これを活用した様々な町おこし事業が成功し県外からの参加者が年々増え、「じかに喜ぶ顔が見られて交流って面白い」と、経済効果以上に農家の意識を変え始めた。その後、町全体でさまざまな取り組みを始めることになる。

平成3年には、『チェリーセンター』をオープン。国道沿いに位置するこの施設は、農家の婦人100人による農産物や加工品の直売施設で、今では年間3億円に迫る売り上げを誇る場所となった。

「この年からすべてが変わりました。農家の奥さんたちが農業を手伝うだけでなく、それぞれ何ができるのか、何か売るものを作れるのか、自分たちで考えるようになったんです」

そう語る農家婦人の田中久子さんは、毎朝4時に起きて「おやき」を焼いている。また平成7年からは、名川町や南部町を含む地元の4つの町が連携して中高生の修学旅行の農作業体験や宿泊の受け入れを、農家たち自らがやってきた。

そんなさまざまなアイデアで「交流」を続けてきたこの町は、交流事業

のさらなる発展を目指して、平成16年、バーチャルビレッジ『達者村』を開村した。村と言っても、どこかに観光用施設を作ってオープンさせたのではない。町に存在するすべてを誇るべき資源と捉えて、町全体を指して『達者村』と名づけたもの。まさに、擬似農村。達者村コーディネーターであり、自らも農家である小沢田晃さんは言う。

「町って言うのは、そこにいる人たちだけじゃ完成しない。昔は自分の農地に人が入るのに抵抗感があった時期もありました。でも交流し始めてみて、自分の知っていることが訪れた人の役

に立つのだと知り、やりがいを感じるようになった。交流しないと町は活性化はしないんです」

「〇〇年後に完成」というような事業ではなく、訪れた人たちと一緒に作り上げていくという町民全体の想いを込めて、「バーチャルビレッジ」と呼んでいる。農業体験をしに行くだけでもいいし、自分の持っている体験を還元しに行くのもいい。その交流が地元の人たちの「経験」となることで、この町はもっともっと「達者」になっていくのだ。

「交流居住」施策の概要

昭和61年から始めた農作業体験『さくらんぼ狩り』から、グリーン・ツーリズムの数々の賞を受賞しているバーチャルビレッジ『達者村』まで、町民が行政と一体となって交流事業の取り組みを行っている。「何かを用意していますというより、〴〵こんなことはできますか？。と訪れる人たちからどんどんリクエストが欲しい」と役場の西村幸作さん（南部町農林課グリーン・ツーリズム推進室室長補佐）は語る。「行政はあくまで黒子」との姿勢から、近い将来に『達者村』のNPO法人による運営を目指している。

目的別滞在タイプ

type A 〴〵ちよつと、田舎暮らし

短期農作業体験

県内有数の「果樹の里」「農業観光の町」である南部町では、県内の生産量を誇る『さくらんぼ狩り』に各地から多くの家族連れが訪れている。また、高級果実の評価を受ける『ゼネラル・レクラーク』や当地を発祥の地とするにん

にくの主力品種『ふくちホワイト六片種』など農業資源にも恵まれており、りんごの受粉や花摘み、梅、桃、梨、いちご狩りなど、季節に合わせた22のメニューが用意されている。



type B 〴〵のんびり、田舎暮らし

達者村

平成16年に開村した擬似農村。町民も訪れた人もみんなが達者になれる村、「友〜ったり、遊〜ったり、農〜んびり」がコンセプト。「達者」とは、①健康で長生きすること、②物事に熟達していること。モニターとして神奈川県在住の谷中夫

婦が、約3ヶ月の滞在を行い村民第1号となるなど、訪れた人との滞在型交流の実現を目指している。2005年、『第3回オーライ！ニッポン大賞 内閣総理大臣賞』『第1回JTB交流文化賞 優秀賞』等を受賞。



data

青森県の東南に位置し、県南の拠点都市八戸市の西部に隣接している盆地地帯。冬の寒さは厳しいものの、東北地方の北部にしては雪が少ない。「バナナとパイナップルとみかん以外は何でも穫れるくだもの里」（工藤南部町長）。
●人口…22,267人／世帯数…7,365世帯（2006年4月20日現在）
●交通…東北新幹線八戸駅から車で15分



05

里の畑で四季を感じて 宮城県丸森町

みやぎけん・まるもりまち

「水とみどりの輝くまち」が枕詞の宮城県・丸森町。雄大な阿武隈の川と山地に抱かれたこの町には、桜の花吹雪から雪化粧まで、詩情豊かな表情が楽しめる自然を目当てに、訪れる人が絶えない。『日本の棚田100選』に選ばれた大張沢尻地域の棚田や県内一の大銀杏など、四季を通じての見所がたくさんある。また、町の中心部に位置する観光名所・齋理屋敷は江戸時代に7代続いた豪商・齋藤理助の屋敷がそっくり町に寄贈されたもので、当時を知る貴重な郷土館となっている。

そんな自然と歴史に育まれたこの町に魅力を感じたひとり・北村保さんは、14年前に横浜の市役所を退職し、この町に移り住んできた。「他の町や村も見たいのですが、なだらかな阿武隈山地に、里の原風景を見たのです」というのが、この町に定住を決めた理由。畑つきの農家を買って、ジャガイモやタマネギなど野菜の収穫を楽しみながら農業体験館『里の家』という、貸し切り可能な里の家を営んでいる。「都市と農村を交流させる場を作りたいのですが、まだこの家をどう使うか暗中模索中」という。現在は7～8名の子どもづれ

で滞在する『子育てを考える会』といった団体や、学生の農業研修会などの利用が多い。しかし、体験で得るものの多さを考えると、「もっと長く滞在してもらったほうが良いのでは」と考えている。一方、東北では唯一丸森町に存在する滞在型市民農園『不動尊クライנגアルテン』（クライングアルテン＝ドイツ語で「市民農園」の意）管理組合の大泉邦靖さんはこう語る。「別荘と畑を持ちたい人にはうってつけの場所。水も空気もきれいだから、食物にも自分の体にもいい。最初は町民の私たちが丁寧

「交流居住」施策の概要

ほぼ「滞在型市民農園」に集約されているといっても良いが、大きな自然に魅せられ、都市から移住する人も珍しくない。農業を体験しながら丸森の自然に親しむ都市住民を受け入れ、地域住民との継続的な交流を行う拠点として整備された。比較的平坦部にある『不動尊クライングアルテン』と、森に囲まれた『筆甫クライングアルテン』の2ヶ所がある。申し込みは1年単位。1区画300㎡の敷地面積のうち、40～50㎡はログハウスに、150㎡が農地面積となっており、思い思いに野菜や花、樹木を育てられる。管理をする町民スタッフが在申しているため、分からないことがあれば何でも聞ける体制は、農業初心者にとっても心強い見方である。

目的別滞在タイプ

type A ちよこつと、田舎暮らし

短期滞在型

経営者の北村さんはIターン者。畑つきの農家を買って造りの良さを残しつつ改装し、B&B形式の宿泊も可能な農業体験館『里の家』を開放している。貸し切りでひと

り1泊朝食つきで4,000円となっており、食事は宿泊者におまかせ。畑にあるトマトなどの野菜をもぎ取って料理もさせてくれる、贅沢な体験ができる場所である。



type B のんびり、田舎暮らし

滞在型市民農園

休憩施設付き貸し農園で農業体験をしながら丸森の自然に親しむ都市住民を受け入れ、地域住民との継続的な交流を行う拠点施設として村が整備を行った。26区画(不

動尊18区画、筆甫8区画)があり、『不動尊クライングアルテン』は年間36万円で300㎡の休憩施設つき農園を借りられる(2006年7月現在は満室)。



に教えていたけれど、今は滞在者の方が逆に上手に育てたりする」東京に住まいを持ちながら、畑作業を楽しむために毎月訪れる生活を送る定年後のご夫婦や、全国を取材して歩くライターさんがぶらっと立ち寄っては何日も滞在したりと、別荘のように「田舎に気軽に家を持つ」感覚が、丸森の自然と相俟って魅力に感じられるようだ。「農業を終わった後にみんなでご飯を食べ、お酒を飲むという習慣はもう失われてしまった。けれども、町民同士でも流入者の方でも、プログラムでレールを敷かれたような交流では

なく、本人同士で自然発生するような交流が生まれるきっかけを私たちが作ってあげれば」と話す大泉さん。行政に頼らない町民の積極的な意識が、町を変える要素のひとつであることは間違いない。

data
宮城県の南端に位置し、阿武隈川流域の平坦地と阿武隈山脈の支脈に囲まれた盆地で構成される町。県の3.8%の土地を占める大きな町である。蔵で有名な齋理屋敷や、阿武隈ライン船くだりなど、観光名所は多い。
●人口…17,086人/世帯数…5,032世帯(2006年4月1日現在)
●交通…東北新幹線福島駅より阿武隈急行で約50分、仙台駅より約1時間



06

ありのままに`何も無い、風景。 山形県白鷹町

やまがたけん・しらたかまち

「五月雨を集めて早し最上川」、
「ずんずんと夏を流すや最上川」。松尾芭蕉や正岡子規が、その水の豊かさから詩を詠んだ最上川が町の真ん中を流れる白鷹町。最上川に沿って長閑な田園地帯が広がり、米作を中心に、りんご、トマト、酪農による生乳生産がさかんだ。山形県の中央部のこの町は、東に白鷹丘陵、西に朝日山系を望む置賜盆地に位置している。昭和29年10月に荒砥町、鮎貝村、東根村、白鷹村、十王村、蚕桑村の1町5カ村が合併。翌年、10月に西村山郡朝日町の一部を編入して現在のかたちに至っ

ている。
「人それぞれの捉え方ですが、`何も無い、というのがいいところなのかもしれません。最上川側にあるテラスで昼食をとりながら休憩します。川のせせらぎを聞きながら、町の新しいきっかけ作りを考える。町のいいところを活かしながら事業を進めるのが楽しいです」

交流居住の施策『ソフト小村』に拠点を置くIT会社・(有)ソフト小村しらたかの竹田陽子さんは、ITというデジタルの仕事に従事するなか、自然という対極する要素の大切さを話してくれ

た。
四方を山に囲まれ、大きな川が人々の生活の中心にある町。そんな古き良き`正しいカタチ、を保った白鷹町は、水によって受ける恩恵が大きい。「食材がいいというのは、基本的に水がいいということ。この辺りは、野菜、果物のほかに蕎麦もおいしいって言われるけど、それはまず水が美しいからなんです」

役場の交流居住担当・政策改革課の大木健一さんの勧めで立ち寄った蕎麦屋の店員さんの言葉は、深い緑の山々と清らかに流れる最上川と共に過ご

「交流居住」施策の概要

平成14年度から16年度にかけてレンタルオフィスを整備。30坪と70坪のロッジ風オフィス計6棟（各3万円と5.7万円/月）からソフト小村は構成される。「地元の高校生にアンケートをとると多くの生徒は白鷹で生活したがっているんです。若い世代が活躍できる場を可能な限り広げておきたい」。白鷹産業振興課の斎藤重雄さんは、交流居住による次の効果も視野に入れて、「いかに移住者（企業）と町が連携できていくかが本当に大切なことだ」とも語っている。

目的別滞在タイプ

type A `ちよこつと、田舎暮らし

ネット交流施策

地域の食材をネットを通じて都市住民へ提供し、白鷹町へ訪れてもらうことを目的として開始された『おすそわけ.com』。白鷹の農家は、家族そろっておいしいご飯を食べることを第一として栽培しており、愛情を込めて育てられた作物は、

完熟するまで収穫されないため、本当に旬のものだけがネットで販売される。現在は民間企業によって運営されており、白鷹町のイベントと組み合わせることで、ネットがきっかけの往来者も増加しはじめている。



type C `どっぷり、田舎暮らし

産業振興交流施設

『ソフト小村』は、情報関連産業企業が集積、構成する小さな村。都市部に集中しがちな仕事や技術を白鷹町に移転させている。土地画整理事業の実施に合わせて6棟のオフィス施設が建設され、共に安価で提供されている。1階からの吹き抜け、休憩室、ロッカー

ルーム、ミーティングルーム、オフィス、サーバー室など、施設内設備、最上川に沿った自然環境、国道整備による都市部からのアクセス向上など、環境面、ビジネス面共に快適な条件が整っている。土地画整理事業に関しては、移住の相談も可能。



てきた経験からか、直接心に届く説得力を持っていた。

1〜2階が吹き抜けになっており、天井の窓から燦々と自然光が降り注ぐ社内。約70坪のロッジを社屋にしているIDSしらたかの佐藤英夫さんは、東京に本社を置く企業で働き、独立後、ソフト小村で防災設備機械の設計・開発をしている。

「とにかく静かですから、集中力が必要とされる作業にはこれ以上ないくらい最適な環境です。製造ではなく設計の部分ですからインフラは問題ありません。情報はネットでほとんど間に合

いますから、できるかぎりいい環境で仕事をしたかったんです」

白鷹町に住む人、訪れた人、みんなが「ありのままの白鷹町がいい」と口をそろえる。白鷹町は`何も無い、ようで、人が元来求めるすべてがあるのかもしれない。

data
県都・山形市まで30km、中核都市の米沢市まで約35km。最上川沿いには豊かな田園地帯が広がり、米作中心にりんご、トマト、酪農による生乳生産が有名。また、樹齢500年以上のエドヒガンザクラの古木が多いことから「古典桜の里」として訪れる観光客も多い。
●人口…16,330人。世帯数…4,499世帯（2005年度国勢調査の人口と世帯数）
●交通…山形新幹線赤湯駅からフラワー長井線で約60分



07

「シルクロード」の想いを再び。 福島県川俣町

ふくしまけん・かわまたまち

「おいしいものはおいしいものを知っている人にしかつくれない」と話してくれた産業課商工交流係の橋本隆秀さん。名物にうまいものなし、とは言いが、川俣町の特産品はおしなべて例外である。阿武隈の大地に囲まれた冷涼な空気と、おいしい水が生み出す田んぼからはコシヒカリ。里山の湧水で作られた豆腐・納豆などは品評会で1等をとるほどの絶品で、県外からも買いに来る人が多い。最近はそのらに加えて『川俣シャモ』が有名である。日本三大地鶏と肩を並べるほどの評価を受ける川俣シャモは、町の

新しい産業のひとつになりつつある。町の中にもシャモを使った親子丼を出す店や、地元で打つ蕎麦と合わせたシャモ南蛮を名物としている蕎麦店もある。畜産も盛んで、風味豊かなナチュラルチーズやアイスクリームなどは、ほかの畜産地域に勝るものも多い。そんな川俣町は、平安時代以降、絹で栄えた町として活気があった。言い伝えとしては、1,400年程の昔、崇峻天皇の妃・小手姫が政争によって蘇我馬子に連れ去られたわが子を探してたどり着いたのが現在の川俣町といわれており、小手姫は養蚕に適したこの地で、

養蚕と糸紡ぎ、機織の技術を人々に教えたという。それ以降、『安達絹』と呼ばれる良質な絹として、1,600年前後には「絹の市」が立つほど町が栄えた。今でも、町内にある織物に関する展示館や機織体験室などで、その面影を感じることができる。「絹を中心として良い人材とお金が入ってきたのがこの町の歴史。その時代、時代にお金があったというのは、一流を知ることができたということ。だからこの町には今もおいしいものが引き継がれているし、人が資源でもある」と橋本さんは言う。川俣町では、空き家になっている民

「交流居住」施策の概要

地域の活性化を目的に、積極的な移住者の受け入れや継続した交流の推進を図っている。専門の相談窓口を設置して『ニューライフ・ステージ登録制度（UIターン希望者登録制度）』による情報の提供や、地域の人達との仲立ちを行うなどの移住希望者支援に取り組んでいる。移住して民間借家に入居した場合は、UIターン者定住奨励金（月額1万円）を受け取ることが可能。さらに、Iターン者の交流ネットワーク『あいネット』が移住希望者や移住者の心強い相談相手となっており、実際にIターン者として「すてきな暮らし」を送る町民の自宅を訪問したり、地元の人を講師に招いて伝統食づくり体験活動を行うなどの活動も。より良い交流を行うためのイベントは欠かさず行われている。

目的別滞在タイプ

type A “ちよこっと、田舎暮らし”

民間借家

空き家になっている民家や農家を再利用しつつ、資金もかけずに交流居住に利用できる、一石二鳥の取り組み。田舎の家ならではの広さや、畑つきの庭が「本物の生活を送れる」として、都市部からの流入者に喜ばれている。家賃

や約束事などは大家さんと直接交渉となるが、協議の場に役場が立ち会うことで双方が安心できる環境を整えている。川俣町への移住を検討し始めた瞬間から交流（ご近所付き合い）が始まる。



type E 田舎で学んでお手伝い

長期農山村の生活・仕事・文化体験

大都市圏の大学生や若者を対象に、借家の農家などに長期滞在をしながら農山村の生活・仕事・文化などを体験してもらう取り組み。国土交通省の地域づくりインターン事業をきっかけとして始められたもので、生きている行政や地域づくりの現場に参加することが川俣

町ならではのものとなっている。毎年8月の1ヶ月間、若者たちは町での生活にどっぷりと浸り、最後には、彼らが第三者の目から見て感じたことをレポートにまとめ、町へ提出。体験期間が終わってからも、仲良くなった町の人々のところへ遊びに来る若者も多い。



家や農家情報をIターン希望者へ向け提供している。それがきっかけで川俣にIターンし、Iターン者たちのネットワーク『あいネット』を立ち上げ、代表をつとめている藤崎貞之氏も、山の中に200~300坪の畑つき借家を見つけ、現在居住している。「私は東京出身なのですが、20歳くらいから田舎で暮らしたいと思っていたのです。祖母が野菜を作っていたので、他の子よりは自然に親しんでいたというのがあると思いますが、川俣町は、何もなかったところが魅力だと思いますよ」と語る。『あいネット』は、年に3回ほどの味

噌づくりや芋煮会などのイベントを行っており、自分の好きなおつまみなどを持ち寄ってお酒をたのしむ「一品持ち寄りパーティー」は皆の楽しみであるそうだ。

かつてシルクロードの拠点として栄えたというこの町は、外からの人を頻繁に受け入れ、もてなしの文化が育まれていたことを意味している。空き家をIターン者を迎え入れる受け皿として活用している今の川俣町に、その面影が垣間見える。

data

川俣町は福島市のおよそ22km、阿武隈山地西斜面に位置し、古くから絹織物の生産で栄えてきた。北部阿武隈の山なみには、秀麗な花塚山(918m)、高太石山(863m)がそびえ、尾根から西に走る斜面に耕地がひらけている。気候は比較的温暖。特に毎年10月に開かれるフォルクローレフェスティバル(中南米音楽祭)『コスミン・エン・ハボン』は全国から150組に達するグループが参加する国内最大規模のものとして有名。
●人口…16,933人/世帯数…5,361世帯(2006年4月1日現在)
●交通…東北新幹線福島駅からJRバスで約35分



08

まずは、「仮想村民」から。 福島県泉崎村

ふくしまけん・いずみざきむら

白河以北一山百文。江戸～明治時代にかけて言われた、「白河の関所より北の東北は価値がなく、一山でも百文くらいにしかならない」という意味であるが、その白河付近にちょうど位置するのが、福島県・泉崎村である。白河丘陵と須賀川盆地との間に位置し、那須山系から流れ出るおいしい水が自慢のこの村は、「元気の出る街」を目標に掲げ、明るい交流居住を目指している。村長、小林日出夫さんはこう語る。「今まで頑張って働き、定年を迎えた私たちは、自分が稼いだお金でこれか

らを楽しむ権利がある。日本のどこでも自分の気に入った場所に住む権利はあるし、その選択肢をたくさん作るのが行政の仕事であり、私たちの仕事です」泉崎村は福島県の中でも内陸部にあり、比較的温暖で他地域に比べ冬でも積雪は少ない。以前に行った阿武隈川の河川改修が功を奏し、洪水や地震などでの自然災害も少なくなった。加えて、東京からも新幹線で約1時間半という利便性が、さらにこの村の魅力となっている。それらの恵みと、現代の社会には欠かせないコミュニケーショ

ンツールの組み合わせを最大限に活かした取り組みが、『e-村民』の募集である。『e-村民』とは、インターネット上で募集する泉崎村の仮想村民のこと。年に5～6回を予定するイベントで、村へ来てもらう仕掛けを作っている。村民は日本全国にいて、遠くはフランスにも暮らしている。現在の村民数は2,000名強。普段はネット上で村の情報を知るが、実際に土地を借りて、たけのこ掘りや田植え、お酒づくりなど、本物の村民と交流しながら農作業を体験した人は、年に何度も来るようになっているという。

「交流居住」施策の概要

泉崎村のホームページから募集を行う『e-村民』の取り組みが特徴的。定期的に豊富な自然を活かしたイベントを行うことで、村と他県の自宅とを頻繁に往来させるファンを増やし、将来的には定住につなげることを理想としている。幼稚園や児童館などの子育て環境や介護施設も完備。「地域の人々と一緒に暮らしている」という都市にはない連帯感を持ちながら、「大自然に囲まれつつ安心して住める」という魅力が嬉しい。都市からも十分な通勤圏内のため、審査を通ると通勤助成として最大300万円をキャッシュバックするシステムも導入。現在、1名が適用を受けている。

目的別滞在タイプ

type A “ちよこつと、田舎暮らし”

短期農作業体験

豊富な自然ときれいな水を活かした農作業体験を多数実施し、村民と交流をはかっている。たけのこ掘りやそば刈り、秋の収穫祭では村で採れた野菜や米でランチもふるまう。村では日常的な満天の星

空やホテルも、ショートステイを試みる人々にとっては新鮮な驚きになる。年に数回、都内から出発するバスで案内する『現地ご案内無料招待会』で体験可能。



type C “どっぷり、田舎暮らし”

天王台ニュータウン

村が平成7年より造成した、「優雅な田舎暮らし」を提案するニュータウン。憧れの田舎生活を実現できると人気も高い。このニュータウンに住む人のみの特典として、

村が専用の畑を無料で貸してくれることも魅力のひとつ。『e-村民』に登録し、関東ほか他県から何度か訪れるうちに気に入って、購入するケースが多い。



埼玉県在住の齊藤敏夫さんは、定年になったら静かな土地に住みたいと考えていたおり、偶然TV番組でこの村を知った。すぐに体験イベントを申し込み、翌週には村のファンになって『e-村民』に登録。「食べ物もおいしいし、定年を過ぎた人がみんな同じような懐かしい気持ちで移り住んでくるので、それは安心」と村の魅力を話す。「招かれたと思っている側の仮想村民の方々が、実際は逆に村民を手伝う感じになる。その場でおこる本物の交流が楽しい」とは、受け入れ団体『わっはっは！ 泉崎村』交流拡大事業実行

委員会会長である田崎定男さん。この取り組みは、村にある温泉宿などへのショートステイ促進のほか、最終的にはIターン者などに向けての定住を目標としている。つまり、これらのイベントは村から迎えられる人だけでなく、迎える人にとっても、大切な交流の場なのだろう。「白河以北一山百文、と言われた時代は、遙か昔に終わっている。都市ではなく、田舎へ。贅沢な自然に囲まれた泉崎村は、行政の知恵を働かせ、村の魅力をも最大限にアピールしながら、交流の復興をはかっている。

data
東南北部の福島県でもさらに関東よりに位置し、東京周辺から約1時半の好立地。コシヒカリを主とした稲作・畜産が盛んだが、最近では印刷工場などの大型産業が拠点をもち始め、村の活性化に一役買っている。
●人口…7,068人／世帯数…2,065世帯（2006年5月1日現在）
●交通…東北新幹線新白河駅から約15分



09

「原風景」を知る村 群馬県川場村

ぐんまけん・かわばむら

川場村は群馬県の北部に位置し、東京からは約150km。関越自動車道を利用すれば練馬ICから2時間弱の距離だ。村の人口約38%が農業に従事しており、米、こんにゃく、りんご、野菜などを生産している（約18%が専業農家）。村を歩くと田畑が広がり、小川が流れている。道の傍らにたたずむ石仏が村人の生活を見守っている。正月には餅つき、春には端午の節句、夏祭り、収穫の秋と一年を通じて様々な表情があり、20年以上も前からこの日本の原風景とも言える里山の風情を、鈴木忠義東京工業大学名誉教授や村民

が一体となって意識的に残してきた。田園風景、かやぶき屋根の民家を残し、不要な看板を極力抑えて「美しい日本の風景を残そう」と努めた。川場村のすぐ近くには赤倉山、浅松山、田代山が見える。一見、緑溢れる山々だが、多くは戦後の植林政策で悲鳴を上げている。木の価格が下がり、間伐されずに放置されているのだ。「適切な間伐をし、太陽の光をたくさん山林に入りたい。元気な山にしたいね」とは、『やま(森林)づくり塾』の宮田和昌さん。彼は川場の山を教室に春は植林、秋は枝打ちと、村や村外から

の人に森林作業の技術を教えている。徐々にではあるが付近の山の健康状態は良くなってきている。「昔の農家は本当に辛かったんですよ」。元蚕農家の石田房江さんは笑顔で言う。現在はりんごの木のオーナー制度『レンタアップル』を導入し、りんご農家へと転身した。「りんごの木、一本一本にオーナーさんがいます。そのオーナーさんが木の世話をしにやって来て、作業の後に木陰でお弁当を広げている姿はとても楽しそうですね」そんなふれ合いから改めて農業が好

「交流居住」施策の概要

首都圏からアクセスがよいことから、『レンタアップル』『棚田オーナー』『レンタル農園』『やま(森林)づくり塾』と短期滞在型の交流イベントが多い。特に世田谷区とは密接な関係性を20年に渡って築き上げ、都市と農村の新しい関係として日本中から注目が集まっている。この地方に古くから伝わる伝統工芸の紙漉の技術を学ぶ『和紙造形大学』は、「体力的に農作業はちょっと…」という人に支持されている。移住なども受け入れているが、むらづくり振興課は「まずは村をよく知ってもらいたい」と話す。気軽に短期滞在をしたい人には最適の場所。

目的別滞在タイプ

type A “ちよこつと、田舎暮らし

短期農作業体験

健康な山を作る手助けをする。『養成教室』では年4回、1泊2日で村に滞在し、森林作業の基礎である下草刈り、間伐、枝打ち、植林を学ぶ。また、養成教室で学んだ

森林作業技術の更なるレベルアップを目指したい人には『専科教室』も設けられている。希望者には安全管理や自然体験に関する資格が習得できる。



type A “ちよこつと、田舎暮らし

レンタアップル

「都市に住みながらりんごの木を持てる」と評判なのがりんごの木のオーナー制度(レンタアップル)。春の摘花、秋の収穫などりんごの育成状況を通して農作業の一端に触れる。作業日程を農家に直接連絡してから村へ行くため、「まる

でふるさとを訪れるような気持ちになる」と人気だ。津軽、赤城、ふじなど木ごとにオーナーになる人も多いという。たとえ、その木の収穫が無くとも30kg(約100個)が保証されている。



きになったと、石田さんは語ってくれた。またこの村には、東京都世田谷区との『縁組み協定』という特異な制度がある。「姉妹都市では深い関係は築けない。川場村は世田谷区と縁組みをしました。つまり姉妹より強い繋がりなのです。世田谷から直通バスを出すなどして、区民の第二のふるさととして利用してもらっています」とむらづくり振興課のグループリーダー中村雅治さんはいふ。20年間の間に約130万人の区民が「原風景」を求めて村を訪

れている。もちろん、多くの人が訪れることによって「田畑に立ち入り」「農作業中の人を勝手に写真に収める」など、少なからず軋轢はあった。しかし、その問題が起こる度に村人は話し合い、粘り強い姿勢でよりよい方向で解決していった。「だからこそ、川場村の人は閉鎖的でないんです。色々な場所から人が来ることに慣れてますからね」原風景とは、決して景観のことだけではなく、人間本来の関係性も含めてのことかもしれない。

data
群馬県の北に位置し、北関東を代表する武尊山の麓に川場村は位置する。春から秋にかけては登山やハイキング、冬はスキーと周辺にはレジャースポットも多い。アクセスは良く、上越沼田駅からバスで30分。関越自動車道沼田ICから車で約10分の距離。
●人口…3,814人/世帯数…1,067世帯(2006年7月4日現在)
●交通…JR高崎線沼田駅からバスで30分



10

能力をとことん活かせる地域へ

千葉県 NPO法人 千葉自然学校

ちばけん・エヌピーオーほうじん・ちばしぜんがっこう

東京都内から、1時間半。気が付くと、田園風景が広がっている。そこから少し車を走らせるだけで、今度は房総の海に出合える。農山漁村のある県。それが千葉。

都心から近く、ベッドタウン化が進んでいるにもかかわらず、千葉県には山・海、双方の自然が息づいている。その自然の下、仕事をリタイアした人やUターン組が直売所を作るなどして、とても元気に農作業に取り組んでいる。さらに都心から近いということもあってか、県外の若者が移り住み、生計を立てられるよう努力しているという。

それは、都会色か田舎色のどちらかに偏りすぎることなく、地域の良さを大切にしたいという人々の想いが成せる業。NPO法人『千葉自然学校』は、そんな想いをネットワーク化している。

『千葉自然学校』がネットワークを結ぶ会員校は、38校（平成18年4月1日）。38の学校それぞれに特色がある。例えば、どうしても館山に住みたくて県外から移り住んだ若者によるNPO法人『たてやま海辺の鑑定団』ではサンゴウォッチング体験や無人島探検を実施している。その他、温暖な房総の里山にある旧家を訪ねる散策、農作物豊か

な千葉の大地で体験する作物のオーナー、昭和40年代まで風習だった各家の料理をお重に詰め住民と交流する『提げ重パーティー』など、学校により体験できる教室はさまざま。それだけ千葉県には、面白さが詰まっているのだ。「いろんな体験教室があることで、地元の人たちは自分の技術や能力を活かすことができる。そうすると過疎が進む地域でも、老け込まずに生き生きとしてくるんです」。自然学校事務局長・遠藤陽子さんはそう語る。

その証拠に、農村の女性が運営する『よもぎ館』は、朝4:00頃から千葉の

「交流居住」施策の概要

NPO法人『千葉自然学校』は、平成15年、県内の地域資源や人材を活用して、自然体験や農林漁業などの体験を提供することを目的に設立され、ネットワーク型学校として現在会員校の38校と共に活動している。環境教育や体験学習の先生をお年寄りなど地域の方にお願ひし、都市と農山漁村との交流を深めている。また、健康・食・環境に着目し、田舎や自然での過ごし方の体験など、プログラムの数は豊富。

目的別滞在タイプ

type A 〴〵こっと、田舎暮らし

谷当グリーンクラブ

千葉市若葉区の「わたしの田舎『谷当工房』」。年会費3,000円で土地を借り、水田での米作り、市民の農園で好きな野菜作り、キャンプ場（共同）で炭焼きなどを体験できる。加えて、将来定住した時に地域に溶け込めるようにと、クリ

ンアップは地域の人と参加者が共同で作業する。体験を通して生活のための技術を身につける。工房では、スモークハムやソーセージ教室などの一日体験やケーキ教室などカルチャー体験もある。



type E 田舎で学んでお手伝い

自然体験活動・リーダー養成

地域の人の知識や技術による、自然体験指導者、農林漁業体験指導者の養成を行っている。週末を過ごす拠点とするためにこの養成講座を受講し、指導助手としてイベントツアーに参加している人もいる。さらに県内外問わず将来千葉の農山漁村への定住を検討してい

る人が、興味ある分野や自分の能力を使って「事業にできるかもしれない」という可能性を伸ばす目的もある。また次のブラッシュアップとして、養成した自然体験活動リーダーへ向けての自然体験イベントツアーも実施している。



ことん使える地域へ。そうすることで、地域の人はより活発になり、人と人の繋がりが生まれる。千葉の広い自然と地元の人々の心が、それを可能にしているのだろう。

郷土料理「太巻き寿司」を作り直売所で販売しているが、さらに技術を思う存分発揮するために、体験工房まで作ったという。

「自然学校は、何も地元の人だけの技術とは限らない。都市から来る人の能力との交流の場でもあるんです。自分の持っている能力をとことん使うことが大切。もしかしたら将来千葉へ移住した時に、活かせるかもしれないでしょ？ そうやって地域の人も千葉へやって来る人も、自分の足場を持って元気に夢を叶えていければ」

自分の持っている技術や能力を、と

data

首都圏の東側に位置し、太平洋に突き出た半島。南東は太平洋に面し、西は東京湾を臨む。面積は全国第28位。東京都と神奈川県を合わせたよりも広い。気候は温暖。人口は、全国で6番目に多い。第一次産業の中でも農業産出額は北海道に次いで全国2位（2005年）。

●人口…6,056,159人（2005年10月1日現在）



11

海・里・山が魅せる田舎の原風景

新潟県上越市・十日町市

にいがたけん・じょうえつし・とおかまちし

上越市・十日町市の体験交流が本格的に行われるようになったのは、平成10年にさかのぼる。当時、まだ上越市・十日町市に各市町村が合併される前の東頸城地域が、地元の旅館・民宿や体験施設と協力し、「体験型の観光地を目指そう」というひとつの志のもと「越後田舎体験」をスタートさせた。県の南東部に位置する東頸城は安塚、浦川原、松代、松之山、大島、牧の6つの地区で分かれ、どの地域も中山間地の豪雪地域。その雪が育んだブナの原生林を始めとする豊かな自然と美しい棚田、そして茅葺きの家が残りに、こ

こは日本の田舎の原風景を堪能できる場所として知られている。また、平成17年1月、4月と各町村がそれぞれ上越市、十日町市へと合併したことで、越後田舎体験事業のフィールドも海・里・山と特色ある地域が加わった。「越後田舎体験では、原風景をそのまま活かした形で体験の場をあえて用意はせず、ここで暮らす人々の生活の中で持っている技術や知恵、生き様を体験してもらうような仕組みを採っています」と話すのは、越後田舎体験事務局の小林美佐子さん。現在、越後田舎体験は教育体験旅行の受け入れがメ

インで、小・中・高校生の体験(修学)旅行で訪れる子どもたちが多く、自然と農林業と人との関わりの中から、「豊かな心」、「生きる力」を育む体験学習を提案をしている。田植え・稲刈りや田舎料理づくりなどの農業・味覚工芸体験などを行い、特に3~4人で地域の民家に泊まる「民泊」は人気だ。「一度体験民泊をした子どもがこの土地を気に入ってくれて、家族で改めて遊びに来てくれたりしました。また、うちで栽培した野菜やお米が欲しいとご両親から連絡をもらうようになって。そんな交流が少しずつ増え、今では15~

20の家に定期的のうちで収穫した野菜や米を発送しているんですよ」毎年、年間で約40人の農業体験やホームステイの受け入れをしている上越市大島地区で農業を営んでいる布施正栄さんはそう語る。ここでの体験がその期間の体験で終わることなく、帰った後も心に根付いていてくれることがとても嬉しいという。田舎暮らしを求めJターンをした人もいる(大都市から生まれ故郷に近い地方中核都市などに戻ってくること)。関西で約40年サラリーマンを続けた植木務・花枝さん夫妻は、大島地区に移

り住んで9年目。現在、務さんは自然体験や田舎体験のインストラクターとして活動している。「インストラクターのほかに畑の手入れや山菜採り、冬には雪下ろし。そしてご近所のおつきあいもある。田舎暮らしは退屈している暇がないですよ(笑)。どれも生活の励みになっています」と、この地の魅力を語る。一般の人の体験希望の受け入れ相談も、越後田舎体験推進協議会事務局の方で対応している。愛知県で銀行員をしている女性は事務局へ問い合わせ、布施さんの家に民泊。以降、1年に6

回ほどの割合で今も訪れるという。この地域の風景や空気、そして町の人々の心は、都市に住む人々を童心へと返させてくれるのだろう。
data
上越市・十日町市は、新潟県南西部にあり長野県と隣接し、上越市は日本海に面している。なだらかな山々と棚田、谷沿いの平地が織りなす「だんだんの風景」が広がる典型的な中山間農村地帯。
●上越市の人口…210,733人/世帯数…71,151世帯(2006年7月1日現在)
●十日町市の人口…62,971人/世帯数…19,955世帯(2006年6月30日現在)
●交通…上越新幹線越後湯沢駅からJR北陸本線、JR信越本線、ほくほく線など利用

「交流居住」施策の概要

スキー場と温泉施設という観光だけでなく、体験型の観光も取り組もうと、平成10年、旧東頸城地域が、地元の旅館・民宿や体験施設が協力して『越後田舎体験推進協議会』を結成。町村負担金と参加施設からの会費で事業費用を賄い、『越後田舎体験』をスタートさせる。現在、教育体験旅行の受け入れが主流であるため、一般の受け入れは少ないが、事務局への問い合わせがあった場合は、農家民宿、貸民家の紹介、農業体験等のコーディネートに対応している。平成18年、第3回『オーライ！ニッポン大賞』を授賞。

目的別滞在タイプ

type D 〆行ったり来たり、田舎暮らし

貸農園体験

「都会の生活は便利でなんでも揃っていますが、田舎暮らしは人間本来の暮らしだと思うんです。ここに来た人が少しでも癒されて、自然と共に生きる大切さみたいなものを感じてくれれば」と管理人なしの素泊まり宿、貸民家『みらい』のオーナー若井さん。十日町

市にある『みらい』では、1年間に3回以上宿泊できる人には、貸農園を無料で提供。お米や味噌、野菜などの収穫も若井さんに教わりながら体験可能。
http://www.dab.hi-ho.ne.jp/wakai_kyh/



type E 田舎で学んでお手伝い

越後田舎体験

「自然体験・環境学習」、「農林漁業体験」、「農村生活体験」、「味覚・食体験」、「工芸体験」、「スポーツ体験」など、80以上のプログラムが充実し、季節に合わせて選択可能。舞台は棚田やブナ林をはじめとする生産現場そのもの。専門の

体験農園・体験施設などではなく、インストラクターは地域に生き、生産現場で働く人々で構成されている。特に冬は雪下ろし、かまくら、雪像、キャンドルロード体験など、雪国ならではの体験ができる。





12

合い言葉は、「じよんのび」と。

新潟県柏崎市高柳町

にいがたけん・かしわざきし・たかなぎちょう

標 高891メートルの刈羽黒姫山の麓、鯖石川上流域に広がる静かな山里である、柏崎市高柳町。町の総面積の3分の2以上を傾斜地が占め、山裾のゆるやかな斜面には「全国棚田百選」にも選ばれた棚田が美しく広がっている。真冬には2メートルを越す豪雪地帯でもあるが、「黒姫山の雪が解け、露の臺が顔を出し始める頃は本当に気持ちがいいですよ」と、柏崎市高柳町事務所地域振興課長の高橋さん。高柳の人々の暮らしは、どんなときでも「じよんのび」と営まれている。この地方の方言で「ゆったり、のんびり、芯から気持ちがいい」という意味を持つこの「じよんのび」は、「高柳町=じよんのび」というほど、この地へ訪れる人々に最も親しまれている言葉でもある。

そのきっかけは、旧高柳町時代の交流観光の歴史の始まりにある。昭和63年、「もっとこの町の魅力を外に伝え訪れて欲しい」と願う町の若者たちを中心に発足された『高柳町ふるさと開発協議会』が、「住んでよし、訪れてよし」の町づくりビジョンを生み、「じよんのび」をキーワードに、住民と行政が共同して各種事業展開を始めた。

その活動の最も大きな事業として、平成6年、滞在型交流観光の拠点施設『じよんのび村』をオープン。隣接して、遊びながら自然体験学習ができる『県立こども自然王国』では、自然観察やカヌー・キャンプなどのアウトドア体験から草木染や木工細工体験などが可能で、それぞれ専門のインストラクターが指導してくれる。「今の子どもたちは、何か道具がないと遊べない。ここでは身体ひとつで遊ぶことを学んでもらっています」と子ども王国の館長・村田嘉弥さん。「茅葺きの家には実際に生活をしてい

「交流居住」施策の概要

昭和50年代後半、都市住民の『ふるさと体験ツアー』から始まり、平成3年度からは「農山村滞在型交流観光」をテーマに、『きつねの夜祭り』や『岡田のひょうたんまつり』、『茅葺村とホタルの夕べ』などの、自然文化を活用した滞在型交流観光に取り組む。平成6年、温泉やふるさとレストラン、手づくり工房などを備えた宿泊施設『じよんのび村』を開業。それに合わせ、『萩ノ島かやぶきの里』や『門出かやぶきの里』はサテライト施設として整備。一連の開発が大きく評価され、平成11年度には、(社)日本観光協会主催『第7回優秀観光地づくり賞』で金賞(自治大臣賞)を受賞。

目的別滞在タイプ

type A “ちよこつと、田舎暮らし”

じよんのび村

平成6年にオープンし、子供から大人まで一日楽しめ、日帰り入浴・休憩および宿泊施設も整備された農村リゾート。天然温泉で露天風呂があるほか、自炊可能な貸別荘宿『ファームハウス』、田舎料理

レストラン『銀兵衛』、手作り豆腐、地元山菜、新鮮野菜の揃った『百菜館』などもある。また、隣接には遊びながら自然体験学習ができる『県立こども自然王国』もある。
<http://www.kisnet.or.jp/jon-nobi>



type A “ちよこつと、田舎暮らし”

かやぶきの里

伝統的な茅葺き屋を活かした宿泊施設。現在、『萩ノ島かやぶきの里』と『門出かやぶきの里』の2ヶ所がある。萩ノ島地区は趣のある約20戸のかやぶき民家が、田んぼをぐるりと囲んで点在。初めて訪れ

ても、どこかで見たような懐しい気分になる。日本の農村景観百選にも指定されている。門出・萩ノ島それぞれ2棟の宿泊施設があり見学も可能。



る人々がいます。それが何より味わい深いものなんですよ。高橋さんがこう語る、じよんのび村のサテライト施設『萩ノ島かやぶきの里』と『門出かやぶきの里』では、それぞれに民宿タイプの「かやぶきの家」を計4棟整備。地元農家のお母さんたちの手作り田舎料理を肴に地酒で一杯…都会では味わえない贅沢なひとときにリピーターも多い。『門出かやぶきの里』の管理と窓口を勤めると共に、400年の伝統を持つ『越後門出和紙』の職人でもある小林康生さんは「人も物の流れも、農村から都

市へと一方通行だったけれど、都市も農村から学ぶことはたくさんある」と、都市との交流の必要性をずっと唱えてきた人のひとり。門出地区で門出和紙工房を営み、そこで新潟の名酒『久保田』のラベルを手がけながら後継者を育成し、並行して茅葺きの家の修復に力を尽くすなど、まちおこしに熱心に取り組んでいる。「紙はつくるものでなく、育てるもの」。小林さんのこの言葉は、高柳の地域づくりにもあてはまる。市民の人と行政が一体となって地域づくりを考え、この地域を訪れる人々と共に高柳

地域を育てていく。これからも「じよんのび」と都市との交流を深めていくのだろう。

data
柏崎市は新潟県の中央部に位置する風光明媚な地方都市。うち高柳町は市の最南端に位置する純農山村。西北に黒姫山系がそびえ、町の中央を鯖石川が流れる。冬期は積雪量が2mを超える有数の豪雪地帯でもある。
●人口…94,258人/世帯数…33,542世帯(2006年6月30日現在)
●交通…上越新幹線長岡駅から信越本線へ乗り換え、柏崎駅で下車。そこから車で約40分



13

ここは天然のレジャーランド 新潟県魚沼市

にいがたけん・うおぬまし

日本有数の豪雪地であり、日本一の米として名高い『魚沼産コシヒカリ』のメイン産地としても有名な魚沼市。豊かな米が育まれるのも、この地域特有の四季がはっきりとしている気候と土壌に理由があり、それが米どころとなるゆえんであると同時に魚沼市の魅力となっている。新緑と山菜料理が美味しい春に始まり、清流、魚野川・破間川での鮎釣りや高層湿生植物の宝庫の尾瀬散策が楽しい夏。奥只見湖周辺の紅葉に見とれる秋。スキー場などでのウィンタースポーツが盛んな冬。そして市内随所に点在する温泉

の湯煙…。四季折々変化する自然の色彩りは、まるで天然のレジャーランドのようで心と体を癒してくれることでしょう。

「ここに住む人々にとって農業は趣味みたいなものです。自分で育てた旬の野菜や米を収穫し、食べる。自給自足の生活が生きる上での基本となっていますね」と語るのは、魚沼市地域振興課地域づくり班係長の仲丸晋さん。将来的には仲丸さん自身も本格的に農業に取り組んでみたいそうだ。

そんな魚沼市のなかで交流居住に特に力を入れているのは、新潟県と福島

県を結ぶ国道252号が通り、周囲を守門岳や浅草岳で囲まれた渓谷型の農山村の入広瀬地区。滋味豊かな野山の幸・山菜が豊富に採れることから、昭和58年にミニ独立国『さんさい共和国』宣言し、森林資源の保全と活用、自然への回帰が図られている。この『ミニ独立国』とは、昭和60年代後半から全国各地でブームとなったバーチャル国家で、それぞれの地域の特徴を活かして観光資源とし、地域の活性化を図るといった目的を持つ。交流居住としては現在、都市に住む小・中・高校生をターゲットにした修学旅行やサマースクー

「交流居住」施策の概要

昭和58年、旧入広瀬村がバーチャル国家『さんさい共和国』として独立を宣言。地域づくりに力を入れ、都市との交流人口の増加を図るとともに交流移住に取り組む。現在は魚沼市商工観光課が窓口となり、団体から個人客の方まで受け入れ可能な農家民泊や都市の小・中・高校生をターゲットにした総合体験学習『まるごと大自然にどっぷりと』が年間を通し積極的に行われている。

目的別滞在タイプ

type A 〴〵こつと、田舎暮らし

農家民宿

現在、魚沼市では団体から個人客の方まで受け入れ可能な農家民宿が4軒、体験民宿が9軒登録されている。米づくり、野菜の栽培、山菜採りや自然とのふれあい体験が可能だが、訪れる季節によって体験できるメニューも変化するため、事前に問い合わせが必要。「こ

ちらから〴〵こんな体験しましょう、とは言いません。なんにもしないでのんびりとした人は一日中のんびり過ごせるように、おもてなしをしますし、田植えを体験したい人は一緒にします。自由な時間を過ごしてもらいたい」と農家民宿のご主人は語る。



type E 田舎で学んでお手伝い

～まるごと大自然にどっぷりと～総合学習体験

山菜探索、農業体験、ワラ細工体験、自然観察を兼ねたハイキング、日本百名山のひとつ駒ヶ岳や平ヶ岳登山など、魚沼市の地域の特性を活かしたプログラムが充実。冬にはスキー、ミニかんじきづくり、

雪像作り、餅つき体験など、豪雪地帯ならではの体験ができる。宿泊所（浅草山荘、民宿旅館ほか）には大自然の展望が望める温泉付きの場所も多く、体験学習後のリフレッシュに最適。



ル、ウィンタースクールに適した『～まるごと大自然にどっぷりと～総合学習体験』の実践をメインとしながら、一般の人にも向けた農家民泊制度も整いつつある。

東京都から入広瀬地区へIターンした土方陽子さんは、農家民宿と農家レストラン『一陽』をオープン。平成2年、東京都庁の職員として働いていた土方さんは、友人に誘われ山菜採りにこの地へ何度か訪れるうちに『終の住処にしたい、と空き家を購入し移り住み、驚くことに定年退職までの間、ここから毎日通勤をして定年まで勤め上

げた。「最初、近所の人たちは私がいつ東京へ戻るかと思っていたみたいです（笑）。特に冬の豪雪は想像以上ですから。今は私を家族のように接してくれて、冬は雪下ろし、春は田植えを一緒にするんです」と、当時は都市部ではない近所の人々との交流について考えさせられたと話す。

『一陽』ではこの地の澄んだ空気や美しい風景、美味しい食事…ゆっくり、のんびりと味わって寛いでもらいたいですね」

刻々と変化を遂げる四季の景色と気温の変化が、人々の生活を深く豊かに

する。魚沼市が抱えた天然のレジャーランドが、訪れた人の心をゆっくりととらえていく。

data
魚沼市は平成16年に新潟県中越地区の6町村（小出町・堀之内町・湯之谷村・広神村・守門村・入広瀬村）が合併して誕生した新しい市。新潟県の南東に位置し、東は福島県、南は群馬県に接している。広大な市の面積の4分の3以上が山林・原野で占められている自然豊かな地域。
●人口…43,697人／世帯数…13,582世帯（2006年6月1日現在）
●交通…上越新幹線浦佐駅から市街まで車で10分



14

日本で一番長く、日の照るまち 山梨県北杜市

やまなしけん・ほくとし

東京から中央自動車道を車で走ること2時間半。八ヶ岳連峰を望む自然の恵みが豊かな地、それが北杜市だ。山梨県の北西部に位置する北杜市は、北は八ヶ岳連峰、南西は甲斐駒ヶ岳から連なる南アルプス、東は茅ヶ岳、北東は瑞牆山の、日本を代表する美しい山岳景観に囲まれている。清らかな豊富な水資源、高原性の気候、日本で一番長い日照時間、歴史的な街並みなど、その美しさは数々の日本100選にも選ばれている。

北杜市は平成16年に近隣の7町村の合併により誕生。さらに今年3月に小

淵沢町も合併し、山梨県最大の市となった。そんな北杜市の交流居住において特筆すべき点は、全国で唯一NPO法人が行政の前に立って各種事業を取りまとめているということ。NPO法人『えがおつなげて』では、「村・人・時代づくり」を合い言葉に、首都圏を中心とした様々な地域、職業の人がネットワークを結び、多面的な都市と農村の交流活動を展開。代表の曾根原久司さんは「都市と農村が交流するには首都圏から近いこの地が最適」といい、軽快なフットワークと、熱心な活動で行政からも一目置かれる存在だ。彼自身、

長野の農村で生まれ育ち、上京した後北杜市に移住。いわゆるUターン的一步手前のJターン経験者だ。「田舎にいくなら何かしら自分の特技を生かさないと。私の場合は経営コンサルタントをしていたことから、田舎と都市を結ぶコンサルタント的な存在であろうと思っています。`半農半X`。つまり半分農業、半分特技を生かした生活。これがここでの暮らしをエンジョイできる秘訣です」と田舎暮らしの極意を伝えてくれた。北杜市役所農政課農政担当の藤原さんは「曾根原さんには教わることばかり。これからもNPOと行政

「交流居住」施策の概要

平成13年に設立されたNPO法人『えがおつなげて』が中心となり、交流居住施策をまとめている。もちろん北杜市役所もグリーンツーリズムは観光課が窓口となっているが、NPO法人ならではの会員を抱えている強みと、すべての角度から把握し対応できるという点から、当NPOが全面的に企画・運営するかたちをとる。構造改革特区制度が始まった平成15年、農地賃貸契約がNPOでもできる農業特区の第1号認定を受け、農地賃貸契約を結んだ。これにより、遊休農地を賃貸しボランティアと共に開墾。復活した農地は都市農村交流のための各種プログラムに活かされる。

目的別滞在タイプ

type A `ちよこつと、田舎暮らし

日本へ帰ろうグリーンツーリズムプログラム



昔から農村で行われてきた農事暦、歳事暦を元に、それをさまざまな農村体験プログラムにして都市の人々に参加してもらう。山菜採りや野菜の種まき、収穫、田植え、稲刈り、味噌仕込み等を企画。地域住民に有力なアドバイザーとし

て事業参画をしてもらうことで、地域密着型の交流を大切にしている。役所側も「この企画が定住に繋がる第一歩になれば」と協力的。この体験後、往来生活を希望する都市住民も多く、レンタル農園の試みも始めている。



type C `どっぷり、田舎暮らし

ファームウエディング



移住する側、受け入れる側、双方が気持ちよく暮らせるよう、心の交流も兼ねて地域住民も参加する農村の資源を活用したウエディング。都会からの招待客はセレモニーに招待されるだけでなく、テントや民宿での宿泊や農業も体験で

きる参加型ウエディング。最近では若者から団塊世代まで希望者の年齢層も幅広く広がっていることから、結婚式という枠に捕われず、銀婚式や歓迎会というかたちでも提案している。



が手を組んで共存していくことで、地域住民にも移住を考えて下さっている方にも住みやすいまちづくりを目指したい」と語る。

実際にNPO法人『えがおつなげて』の活動は、農村体験`日本へ帰ろう`、グリーンツーリズムプログラムをはじめ、住民の高齢化に伴い遊休農地化した土地を農村ボランティアとともに開墾するなど、地域住民との絆と信頼の厚さで成り立っている。この地でファームウエディングをした小黒夫妻（神奈川県出身）は、数回のボランティア活動の後移住を決めた。現在は『えが

おつなげて』のメンバーであり、曾根原さんと共に地域復興に向けて動き回る傍ら、空き家を借りて農的生活を楽しんでいる。「農業は朝から晩までやるのがいっぱい、毎日が健全に忙しい」と、暮らしてこそわかる本音も。「私たちがまだまだ都会の人間。でも暮らしてみても少しずつわかってきたことがある。よく田舎は`何も無い`、というけれど、そうじゃない。都会の方が`何も無い`、のだと思う。それは人間的な面も含めて。これからこの地に来る人たちと、そういったことにもっと気付けていきたい」と語る。健全なる忙し

さの裏側には、自然体で気持ちいい暮らしという名の収穫が待っている。

data
山梨県北西部に位置し山岳景観に囲まれている。冬は寒いが雪は少なく、高原性の気候のため夏は冷涼で過ごしやすい。日本一長い日照時間が農業に適している。

●人口…50,091人/世帯数…19,327世帯(2006年6月1日現在)

●交通…東京から須玉ICまでは車で2時間、電車では韭崎駅まで2時間弱、その後山岳地域までは車かバスで30分程度



15

「結い」に託された共生の思い 長野県飯田市

ながのけん・いいだし

中央アルプスと南アルプスに囲まれた山の都、飯田市。この町は天竜川の豊富な水源により、農業と蚕業が栄えてきた。近年は蚕業に代わり精密工場の製造業が盛んだ。3,000メートル級の山岳地帯から高原、里地、信州の小京都と称される城下町まで、変化に富んだ地形は四季折々の自然を楽しみながら、高い文化の気風も残している。

そんな都市と田舎が共存し、住みやすいといわれているこの地でも、若者の地元離れと農家の高齢化は深刻な問題。この対策のひとつが『ワーキング

ホリデー』制度。グリーンツーリズムの発展型として平成10年よりスタートした。これは農業に関心がある都市住民と、農繁期の手助けを必要としている農家を結びつける「援農、制度で、受入れ側の農家は宿泊と食事を、参加者は労力を無償で提供するがこの制度の特色。実際に6年前から受入れ農家をしている小木曾清一さんは「同じ世代は酒を飲み交わす同志のようだし、若い世代は娘、息子のようで楽しい」と語り、来てくれた参加者の写真とデータを大切にファイリングしている。今では数十冊にもなったファイルを眺

めては、それぞれの参加者との思い出に浸り、農作業以上の収穫を楽しんでいる。

小木曾さん宅にワーキングホリデーとして大阪から来ていた篠英里子さんは「農作業を体験したいと考えた時、お金のやりとりがないこの制度はとても自然な感じがしたんです。お金が発生するとどうしても、＼良いとこ取り、みたいで本当の苦しさを味わえないような気がしたから。農家に宿泊することで、記憶に残る体験ができた」と満足気。この体験が忘れられず、実際に定住する人も増えているという。

「交流居住」施策の概要

山間部を中心に都市交流は盛んだったが、発展形態のグリーンツーリズム事業を平成8年より取り組む。中学生中心の「体験教育旅行」を提案しつつ、一般向けの体験ツアーの開発も積極的に行う。その後「人との交流」をキーワードに、200の体験プログラムを高年齢農家をはじめとする市民インストラクターが担い、訪れる人に感動を与えると共に、高齢者の生き甲斐対策と農業農村の保全に寄与している。今年4月からはIターンやUターンを支援する『結いターンキャリアデザイン室』を飯田市役所に設置。農業移住者以外にも幅広く対応できる窓口として起動する。

目的別滞在タイプ

type A 〴〵こと、田舎暮らし

ワーキングホリデーいいだ

援農を第一目的に、農業をしたくても手がかりがない、農業を真剣に学びたいという人と、農繁期に手が足りない農家を結ぶパートナーシップ事業。梨やりんごなどの摘花・摘果、収穫作業、全国1位を誇る市田柿の収穫・干し柿作り

などが主な作業。一回の滞在日数は3泊4日を標準とし、受入れ農家との個別調整で変更可能。「労力補完」がメインであり、受入れ農家と参加者はあくまで対等な関係にあることから、宿泊・体験・賃金などの金銭の授受は発生しない。



type C 〴〵ぶり、田舎暮らし

結いターン

『結いターン』とはUターン、Iターン希望者への「人材誘導プロジェクト」。市役所の職員からなる『結いターンキャリアデザイン室』が、役所に集まる豊富な情報量で、定住を決めた人と町をつなぐ役割を果たす。中小企業が多い飯田市

では、年齢を問わずキャリアと技術を求めている。中高年には培われた技術の継承を、若い人には子育て支援をすることで、次の世代を育んでもらい人材サイクルの流れを作っていく。これにより経済自立度向上を目指す。



新たな制度として『結いターン』をサポート。これは農業だけでなく、製造業や商業も発展している飯田市ならではの試み。市の経済自立度を高め、分野を越えて定住する人々を誘致するプロジェクトだ。この地には田植えや農作業の手間を交換しあう「結い」という昔からの仕組みがあり、飯田は「結い田」が語源となったともいわれる。これに因み『結い(U)ターン』と名付けた。都会からいきなりIターンで居を構えた場合、農業1本で生活していくには厳しい。そんな時、今まで培った技術やキャリアを飯田の町で活

かし、地域社会に貢献しながら暮らすのもひとつの手、というわけだ。

飯田の住民は与えるだけでなく、吸収することも大切に考えている。「結い」の言葉に託された、共に寄り添う町づくりを目指している。

data

飯田市は日本のほぼ中央に位置し、長野県の最南端における中心都市。東京からは車で3時間半、名古屋からだと1時間半という適度な距離感。年間平均気温は12.7℃で雪が少なく、豊かな自然と優れた景観、四季の変化に富んだ暮らしやすい気候に恵まれている。
●人口…107,683人/世帯数…37,398世帯(2006年6月1日現在)



16

百姓で生きる町

長野県飯山市

ながのけん・いいやまし

飯山盆地を中心に、西に関田山脈・東に三国山脈が走る南北に長い地形を持ち、南西部には斑尾高原、北西部には鍋倉山、東部には北竜湖などがあり、多くの自然資源に恵まれている。スキーや温泉だけでなく、里山の景観の豊かさの中を徒歩で巡る全長80kmのロングトレイル「信越トレイル」も整備されつつあり、自然と人間が共存する新しい試みとして注目を集めている。飯山は世界的な豪雪地帯として知られており、平均気温は10.5℃、年降水量は1,590mmであり、最深積雪平均は平地で142cm、山間部では450cmを上

回り、一年のうち約3分の1の期間が雪におおわれている。だからこそ、飯山の農家の人々は昔から自然と共存し、たくましくこの土地で生きてきた。短期滞在型の交流居住には『飯山まなび塾』と『百姓塾』がある。『飯山まなび塾』は四季がはっきりしている飯山の環境をありのまま知ってもらいたいという企画だ。年に四回、2泊3日で郷土料理を食べ、農家の人々と語らう。定住している人の家を訪問し、生の声を聞く機会もある。「冬は想像以上に厳しい。そこもちゃんと知ってもらいたいですよ。飯山は良いです

よってところだけを見てもらいたいわけではない。本当の暮らしをしっかりと見て帰って欲しい」と飯山市経済部商工観光課観光係の高橋昇一さんは語る。実際に雪かきをし「これほど雪国の暮らしが大変だとは…」と言葉を失う体験者もいるという。『百姓塾』の方はより実践的な農作業を体験する。多くの人々にとって初めての農業体験だ。東京で公務員をする内藤さんは「ずっと、農業には憧れていました。今すぐっていうわけではないけれど、いつかは農業をやりたいなあと思ってここで勉強しています」と

慣れない手つきで耕耘機を動かす。農協の職員がつきっきりで教えていくうちに、内藤さんの姿が様になっていく。やがて小気味よい音を立て耕耘機が畑の土を掘り起こしていった。その後ろ姿を眺めながら高橋さんは言う。「農家って農作業だけじゃないんです。人付き合いやいろいろな仕事をやらなくてはいけない。こうやって、塾で1年2年と学んでもらう内に農家の人に顔を覚えてもらえる。知り合いを作って徐々に溶け込んでもらいたいですね」。百姓とは「百の仕事ができる人」の事を言う。ゆっくりと一つ一つの仕事を

を学んでいく。飯山ではそんな人々の暮らしを優しく見守っている。

data
近傍都市への距離は、長野市へ36km、新潟県新井市へは25km。国道117号、292号、403号が市内を走り、長野市から新潟県十日町方面へJR飯山線が走っているため交通の便はよい。農業以外には仏壇、和紙、スキー工業が盛ん。
●人口…25,578人／世帯数…8,197世帯（2006年5月31日現在）

「交流居住」施策の概要

将来、農業に携わりながら飯山に住みたい人のため、短期型『百姓塾』、長期型『ふるさとへの出発点』の農業体験プランを用意している。前者は農業の基礎知識、後者は実際に畑を借り、農家に泊まりながら農作業を経験していく。それぞれ、市や農協が近隣農家と共に作業をバックアップする。未経験者でも収穫の楽しみを知ることができる。また、飯山で暮らしたいという人には『ふるさと帰郷支援センター』がふるさと探し、をサポート。空き家、住宅地、住宅建設に関する情報を提供してくれる。

目的別滞在タイプ

type A 〆ちよこつと、田舎暮らし

百姓塾

「農業はやってみたいけどよくわからない」。そんな人のために飯山が用意したのが『百姓塾』。月に一度、飯山に集まり仲間と共に農作業を学ぶ（1泊2日、計7回開講）。同じ志、気持ちを持つ参

加者や実際に飯山で生活する生産者たちとの交流も魅力の一つだ。田ではコシヒカリ、畑ではジャガイモ、サツマイモ、大豆、とうもろこしなどを栽培する。収穫時には野菜や米を持ち帰ることができる。



type B 〆のんびり、田舎暮らし

ふるさとへの出発点（素泊まり+畑200㎡）

「田舎暮らしがしたい」。そんな気持ちを後押ししてくれるのがこのコース。農家や民宿に泊まり、畑200㎡を自由に耕作することができる。耕作、管理、収穫などを通して農作業や飯山の四季を実感

できる。農業相談や農具の貸し出しもあるので、「やる気はあるけど経験がない」と言う人でも安心だ。なお、宿泊は料金に応じ20～100泊まで自由に設定でき、家族や仲間と利用することも可能。





17

心地良い「お互い様」な関係 愛知県豊根村

あいちけん・とよねむら

豊根村は愛知県の東北部、長野、静岡両県との県境に位置しており、名古屋から車で2時間半の距離にある。起伏の激しい地形で総面積の93%が山林で占められている山里だ。平成17年に隣接する富山村を編入合併。全村民217名の富山村との合併は、平成の市町村合併の中で全国一のミニ合併でもあった。

地元離れと少子高齢化の進行はこの村でも例外ではない。が、それと同時に昨今の田舎暮らし人気で、若干の活気を取り戻しつつある。豊根村役場の稲垣淳さんは「私自身、豊田市から家

族で移り住んだIターン組。この村で暮らす為に職を探すと、私のような公務員か林業、農業、建設業、観光業、福祉関係に限られてしまうのが現状です。しかし、職を抜きに考えればそれほど不便は感じないし、特に子育てには素晴らしい環境だと思います」という。実際、同県新城市へは車で1時間強、隣接する長野県の飯田市も1時間でいける。それらの都市への就労も通勤圏として可能な距離だ。だがせっかく居住希望者がいるのに、提供できる住居も、短期滞在の宿泊施設も限られているのが現状だった。

そこで平成15年から始めたのが村の豊富な資源である杉の木を利用してつくった『つみきハウス』による交流活動。適正な森林管理のために間伐した木材のうち、利用価値が低く、放置されることが多かった細い木材を有効利用して住宅を建設し、居住希望者に期間付き低価格で貸すというもの。期間中に移住の仕組みづくりや地域住民との交流を深めていくことで村の活性化の促進を図るのが目的だ。

つみきハウスに夫婦で住んでいる水野まさ子さんは、居住後1年が経過。「つみきハウスは、村に来る人には知

られていても、地元の人には意外に知られていなかったんです。だから実際に住んでみて思ったこと、感じたことをかわら版をつくって村の人に配って見たの」と、つみきハウスの初代住民としての気配りも忘れない。他にも豊根村での生活をブログで紹介し、村での暮らしを楽しんでいる。「豊根村は景色の素晴らしさは勿論、人とのつながりが素敵なんです。最初は溶け込むのに努力は必要ですが、受け入れてくれた時は、それが住む上で一番の魅力でもあるんです。今も名古屋と行き来しているのですが、つみきハウス

の木の香りが離れていると恋しくなります」と語る。誰もがこの村の良さを語る時、「人情」と答える。厳しい冬をお互い助け合って暮らして来た風土が密な人間関係を作り上げて来た。この村では何事も「お互い様」なのだ。助け合う気持ちがあってこそこの「お互い様」の精神を、豊根の人々は教えてくれる。

data
愛知県最高峰の茶臼山をはじめ、1,000m級の山々が連なり、標高は140mから1,415mと標高差が1,000m以上ある峡谷型地形。年間の平均気温は12度、年間降水量2,500mmと冷涼多雨で涼しく快適な夏、雪の積もる冬と四季の変化に富んでいる。温泉やスキー場、キャンプ場など施設が整備されており、多くの人を訪れる。
●人口…1,577人／世帯数…608世帯（2006年4月30日現在）

「交流居住」施策の概要

小学生を対象にした「山村生活体験宿泊事業」や、大学生を対象にした「インターン事業」など、若者向けの交流は昭和63年頃から展開されており、過疎化の進む地域の活力の源となっていた。しかし、実際居住を考える対象の人々へのアプローチが希薄だった。平成13年から国土交通省の支援により、積極的に地域交流に取り組む。昨年移住を決めた加藤知則さん（57才）は「いろいろ調べたけれど、年齢制限がなかったのは豊根村だけだった」と語るように、まずは村のことを知ってもらうことが大事と、受け入れる間口を広げた。

目的別滞在タイプ

type A “ちよこつと、田舎暮らし”

山村・自然体験メニュー

交流体験滞在施設『大人の郷』や宿泊体験施設『米富館』での自然体験メニューを通して、豊根村での生活を知ってもらう。先人から守り継がれてきた森や川など、自然を活用しながらの鮎の引っ掛

けや工芸品作り、村をあげて特産地化を図るブルーベリー畑での収穫やジャム作りなど。講師は地元住民が参加することで、都市と地元住民の交流の場にもなっている。



type C “どっぷり、田舎暮らし”

つみきハウス

村の資源である木材を有効利用してつくられた『つみきハウス』を役場指導のもと建築。単身者向け1万5,000円/月、世帯者向け2万円/月と低価格で使用でき、現在3ヶ所に9軒が建っている。短期間（1ヶ月～2年間※）で田舎の生活

や地域住民との交流を図り、将来的には定住に結び付ける。民間のマンションがないこの地でつみきハウスという居住確保により、まずは気軽に体感できる場を提供している。

※現在期間延長に向けて協議中





18

次の一歩を踏み出す町 京都府福知山市

きょうとふ・ふくちやまし

明智光秀が築城した福知山城で知られる福知山市は、由良川流域の福知山盆地にひらけ、1937年4月に京都府で2番目の市として誕生した。2006年には周辺の三和町、夜久野町、大江町と合併し、新しい福知山市が誕生した。京都市から60km、大阪市からは70kmの距離にあり、国道9号線、舞鶴若狭自動車道、JR山陰本線、福知山線及び北近畿タンゴ鉄道宮福線などが走る北近畿の交通の要衝となっている。しかし、この交通の便に恵まれたこともあって若者が市外に流出し、35.76%という高い高齢化比率になっている

(2000年)。世帯数の大きな変化はないため、老人世帯が増加傾向にあると言える。福知山市内の北に位置する大江町は、「鬼退治伝説」で有名な場所で鬼にまつわるイベントや博物館などもあり、町を歩けば、至るところに鬼瓦や鬼の彫刻がある。その鬼伝説の名を取った『鬼の里Uターンプラザ』は、大江町に定住を希望する人々に、「一定期間生活して地域の人と交流を深めてもらい、町に馴染んでもらおう」という考えで作られた施設だ。賃貸契約期間は最長5年。その間に定住に必要な技能(住

居、知識、人脈)などを身につけ、退所後に大江町に住んでもらいたいと考えている。現在、入居先は2ヶ所設けられており、メゾネットタイプ2LDKで35,000~47,000円。入居資格は①将来、大江地域への入居を希望する者。②概ね45歳以下の世帯。「簡単な審査があります。45歳以下の世帯としたのは、大江町に家族で長く住んで欲しいという意味があります」と福知山市農林部農村整備課の森川強志さんはいう。しかし、家はどうかになったとしても、仕事や近所付き合いという面はど

「交流居住」施策の概要

将来、大江地区への定住を希望する45歳以下の世帯(要相談)が、市内に設けられた2ヶ所の定住体験宿泊施設を一定期間(6ヶ月毎更新、最長5年)利用することができる。滞在している間に、職を探したり、町に馴染んでもらい、退所後にスムーズな暮らしができるように支援している。また、大江町に移住してきた人を「インストラクター」として配置しているため、「苦労したこと」「気をつけなければいけないこと」「楽しいこと」など、実際に移住した人の生の声を聞くことができる。

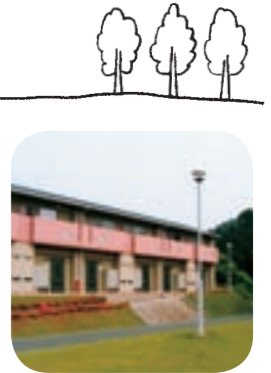
目的別滞在タイプ

type C 〆どっぷり、田舎暮らし

鬼の里Uターン広場

安価で賃貸住宅を提供してくれるサービス。実際、田舎への移住には様々な問題が多い。仕事、住居、地域との関係性。「田舎暮らしをしたいけれど、初めの一歩が踏み出せない」。『鬼の里Uターン広場』はそんな人にぴったりの設備だ。最大契約年数は5年。「その間に仕事を見つけ、ある程度貯金をしていただいて、ぜひ大

江に住んでもらいたいですね。できればこの土地に家を買って、永住していただきたい」と、森川さんは願う。別棟にはサテライトオフィスも完備。月額2,000円で利用できるにも最適な設備が整っている。また、近隣地域には工業団地があり、雇用の場は割合に多い。



うだろう。地域に溶け込むことは難しくないのである。京都府企画環境部調査によると、移住に対しての一番の不安要素は仕事の確保(40.3%)、二番目が住宅の確保(18.7%)、三番目が地域の習慣や人間関係(10.4%)なのだという。「そう言う意味ではこの場所は恵まれていますね。福知山市内には企業はたくさんあります。仕事探してそう困ることもないでしょう。また、定住に向けての支援を行うため、定住インストラクターを配置しています」。この地で定住インストラクターを務める小沢五男さん自身も静岡県からの

移住者。「前は銀行員だったんですけど、移住して農業をやっています。徐々にですが農家の方々と信頼関係を作り、田畑を広げている感じですね」。このように先輩移住者に気軽に相談できる環境は非常に心強い。移住者が農業をやるにしろ、就職先を見つけるにしろ力強い存在だ。大江町は田舎暮らしで再スタートを切ろうという人にとって、初めの一歩が踏み出しやすい場所だと言えよう。

data
北近畿の交通の要、福知山市その北側に大江町はある。大江山、由良川などの豊かな自然に恵まれ、すぐ北には日本海がある。
●人口…83,692人/世帯数…33,806世帯(2006年7月末現在)
●交通…JR大阪駅から福知山線福知山駅で北近畿タンゴ鉄道(KTR)に乗り換え、大江駅下車



19

かやぶき屋根の風景と。 京都府南丹市

きょうとふ・なんたんし

京都府南丹市美山町。京都府のほぼ中央に位置する美山町は三国岳、頭巾山、長老山など名前どおり、美しい800~900m級の連山に囲まれている。この町には今では珍しくなった、かやぶき屋根の家がおよそ213棟残っており、かつての日本の農村で見られたのどかな風景が広がっている。なかでも北村地区には38棟のかやぶき屋根建築があり、1993年には国の重要伝統的建造物群保存地区の選定を受けている。この地区のかやぶき屋根建築は19世紀中頃までに建てられた建物が18棟、もっとも古い物は1796年（寛政8年）

のものがあるという。美山町は『かやぶきの里保存会』を組織し、歴史的景観の保存と後継者が育つ方向を目指し、取り組んできた。一時は後継者が無くなりそうだったかやぶき職人も、この地で修行を積んだ棟梁が誕生するなど、町をあげて景観の保存に取り組んでいる。

過疎化の進む美山町では第3セクター『美山ふるさと株式会社』が1992年に設立され、移住希望者に対する相談、住宅等斡旋を行っている。「自分の食べる野菜を畑で作る。それは大賛成。だけど、地元では何も経験

のない人が美山町で農業だけで暮らしにくい…まあ、それは難しい話です」美山ふるさと株式会社の野谷五三男専務取締役の意見は厳しい。野谷さんがそう言うのは、以前勤務していたJA（農業協同組合）で地元農家の厳しい現実を長年見てきたからこそ。しかし、年金暮らしで生活費を稼ぐ必要のない人や、手に職のある人、に関しては大歓迎だという。たとえば陶芸家などの芸術家。最近ではインターネット回線整備が進んだおかげでWEBデザイナーなどIT関連の仕事をする人も移住しはじめているという。

しかし、「手に職があれば誰でも」というわけでもない。野谷さんはあえて美山町移住を考える家族に対して「関所」を設けている。①町が好き（夏も冬も経験して欲しい）。②住民と仲良くなれる（近所付き合い）。③暮らしになじめる（都市と比べて不便と思う人は無理）。④住民になれる（住民票を移す覚悟）。この4つがクリアできそうにない家族には「移住は止めた方がよい」とアドバイスすることもあるという。「やはり、憧れだけでは長続きしませんよ。湿度は高いし、冬の積雪量は凄

い。そういう悪い条件の時も足を運んで町を見て欲しい。移住はそれから」一つの契約に多くの時間を費やすため、美山ふるさと株式会社を通して移住してきた家族が、その後転居した例はほとんど無い。移住者も積極的に地域の取り組みに参加し、重要な役割を果たしているケースもあるという。密接な人同士の付き合い。かやぶき屋根の家だけでなく、そんな昔ながらの日本のスタイルをも美山町は守り続けている。

data
美山町（人口約5,200人）は京都府のほぼ中央の南丹市に属している。かやぶき屋根の家が多く、町の中を流れる由良川沿いに家々が立ち並び、美しい風景を作り出している。
●人口…36,402人／世帯数…13,425世帯（南丹市・2006年1月1日現在）
●交通…京都駅からJR嵯峨野線で園部駅下車。園部駅西口より南丹市営バスで美山町へ

「交流居住」施策の概要

町への移住は『美山ふるさと株式会社』が窓口になっている。現在、町内2ヶ所で住宅用地の分譲販売を行っている。定住希望者受け入れにあたっての方針は、①一時的な生活ではなく、この先美山町で定住する考えの人。②地域の付き合いなど積極的に溶け込むことができる人。これを原則としている。また、物件も即決するのではなく、冬の条件の良くない時期にも町を見てもらい、何度も足を運んでもらって話を進めていくことを基本としている。同社では移住者に対して地域の雰囲気を感じてもらいたいと考えている。

目的別滞在タイプ

type C 〆どっぷり、田舎暮らし

土地の販売

自然に囲まれた田舎暮らしを支援するため、『美山ふるさと株式会社』が窓口になり、町内にて分譲地を販売している。先にあげた4つの「関所」以外にも、田舎暮らしを長く、円滑に進めていくために同社は「田舎暮らし7ヶ条」として次のようにアドバイスする。
①家族の説得に全力をあげる。②

田舎暮らしの知人を捜す。③農業では食べていけない。④無償の労力をいとわない。⑤プライバシーはないと思え。⑥3年は我慢。⑦現金はやはり必要。一見、厳しい意見だが都市で土地を買い、引越すのではなく長年築き上げてきたその土地のコミュニティに入るには、憧れだけでは難しい。





20 悠々自適に暮らす町
兵庫県朝来市

ひょうごけん・あさごし

兵庫県は瀬戸内海と日本海を有する縦に長い県だ。瀬戸内海のある南には神戸市、姫路市、尼崎市といった大工業都市があるが、六甲山脈を越えた中北部は農業や林業の盛んな地域となっている。朝来市は、兵庫県のほぼ中央に位置し、2005年4月1日に生野・山東・和田山・朝来の4町が合併して誕生した人口35,000人あまりの市だ。朝来市のシンボルは標高353mの山頂にある竹田城跡。別名「虎臥城」とも呼ばれ、全国の史跡ファンに人気が高い。城正面には桜の名所・立雲峡。眼下には城下町が見え、春には桜、秋

には雲海、冬には雪景色と四季折々の風情を楽しむことができる。市内へのアクセスは良く、京阪道からは鉄道、高速道路を利用しておよそ1時間半から2時間。姫路市からはJR播但線や播但自動車道路を利用しておよそ1時間の距離にあり、但馬・山陰地方と京阪神大都市圏を結ぶ交通の要となっている。「3年でようやく土が出来上がって来た感じかな。もう楽しくってね」。Aさんは嬉しそうに畑を見せてくれる。クズ野菜や落ち葉などで作った腐葉土を指さし「完全無農薬でやってるよ。

土が随分良くなった」とにこやかに笑う。その顔は日に焼けとても健康そう。その顔は日に焼けとても健康そう。ネギやジャガイモ、大豆などを植えているという。畑の奥にはトマトがたわわに実っている。都市のスーパーで見るとは違った色つやの良い、大きなトマトだった。ここは都市生活者に農業体験、農村体験の場を提供することを目的として作られた滞在型体験農園施設『クラインガルテン伊由の郷』だ。以前、2.2haの棚田だった場所を再整備し、50㎡の農園を持つ25の滞在施設を整備した。一区画にはロフト付コテージ（4タイプ）

は可能)。一軒、建築途中のログハウスがあった。「こちらの方は月に何度か来て、仲間と木を切ったり、打ち付けたりと仕事をされていますね。ゆっくりゆっくりですが、御自身で自分の家をお作りの様子です」朝来市役所朝来支所の福原宏明さんがそう教えてくれた。悠々自適に、第二の人生を切り拓く。朝来市はそんな気持ちを後押ししてくれる町だ。

一方、標高400mのさのう高原にはログハウスが点在する。『さのう高原セカンドハウス村』と呼ばれる住宅用地賃貸システムで、朝来町の管理地を30年の契約で貸し出している（一区画約300坪。期間満了後は協議の上、更新

data
兵庫県のほぼ中央。農業が盛んで日本三大ねぎの一つ、『岩津ねぎ』の産地として有名。アクセスは神戸から特急で約2時間。京都より1時間50分。中国自動車道を利用した場合、大阪より約2時間ほど。
●人口…34,785人／世帯数…11,798世帯（2005年度国勢調査より）

「交流居住」施策の概要

朝来市では、近年「人・自然・心」をキーワードとしてまちづくりに取り組んでおり、豊かな自然環境を活かした交流事業を展開している。山内地区では残された棚田を活用し、『クラインガルテン伊由の郷』を設置した。週末には、採れた野菜を持ち寄り、自然と宴会になるという。また、家族単位でのんびりと時間を過ごしたいという人には分譲地『さのう高原セカンドハウス村』が人気だ。山間部にあるため、車での移動が必須だが、それ故にプライバシーは保たれ、ゆっくりとした滞在を楽しめる。

目的別滞在タイプ

type D 〓行ったり来たり、田舎暮らし

クラインガルテン伊由の郷



農園付コテージ。現在、25区画。一区画の大きさは約184～391㎡。農園は50㎡がついている。使用料は1ヶ月32,000円～48,000円（年間契約）。区画とコテージの大きさによって変わる。デッキが設けら

れ、開放的な雰囲気のコテージは2～4人がゆったりとくつろげる広さ。また、園内のクラブハウスには、暖炉のあるサロン、掘りごたつのある和室があり交流や研修場として使用することができる。



type D 〓行ったり来たり、田舎暮らし

セカンドハウス村



旧朝来町西部に位置するさのう高原にある分譲地。一区画約300坪の大きめの区画に、現在30戸余りの方がセカンドハウスを建設し、農作業を行うなど豊かな自然環境の中で暮らしている。さのう高原

は自然を利用した観光施設が豊富で、周囲には宿泊施設、テニスコート、パラグライダー場などのレジャー施設があり、緑あふれる環境の中思い思いの時間を過ごすことができる。





21

木々と水に囲まれた村 奈良県川上村

ならけん・かわかみむら

奈良県南部の川上村は人口2,200人の小さな村だ。面積の95%を占める山林には全国的に有名な吉野杉が植林されている。川上村はその吉野杉と吉野川(和歌山県では紀ノ川)の源流として知られている。林業で栄えた村ではあったが、最近では人口減少に伴い、村にも空家が目立ってきた。川上村は、村内の空家情報をデータベース化し、村外からの移住を考える人に安価で貸し出す仕組み『空家バンク』を開始した。

空家を放っておけば、老朽化が進み廃屋になる。これは川上村だけの問題

ではなく、日本中の過疎の村共通の悩みだ。家は「生きている」。定期的に風を通し、空気を入れ換えないと畳や壁などに湿気が溜まり柱を腐らせてしまう。家は人が住めば長い年月使うことができる。家だけでなく畑や庭の放置も問題になっている。古くから建つ家の多くには隣家との垣根がない。そのため、隣の家との境界が曖昧な場合が多い。庭草は一年も放置していると人の丈ほどに育ち、タヌキや野犬などが住み着いてしまうこともあるという。そこを隠れ家にした動物が田畑を荒らす。昔なら、近隣の人たちが自分の家

の草刈りのついでに刈っていたが、村も高齢化が進み、隣人たちも放置してしまいがちだ。

そんな川上村役場にここ数年、大阪や近隣の都市から「定年後は畑をやりながらのんびり暮らしたい。川上村に空家はないか?」という問い合わせが多く寄せられてきた。川上村企画財政課の中川雅偉さんは村一軒一軒を周り、多くの空家の存在を確認した。しかし、その所有者の多くは全国に散らばっていた。付近の家に届いた年賀状などを頼りに電話をかけた。「墓参りに帰った時に使いたいから」「正月に使いた

「交流居住」施策の概要

田舎暮らしをしたいという都市の人に空家を貸す『空家バンク』は2006年にスタートしたばかり。現在、役場では村を歩き回り、空家のデータベース化をすすめている。取り組んでいるのは主に3つ。①空家情報のデータベース化。②居住希望者(借りたい人)への村内情報の提供。③貸したい人と借りたい人の紹介。借りたい人と貸したい人の紹介が済めば、建物の修理や賃貸契約は両者の話し合いで済む。入居が決まれば、村での生活が円滑に行えるよう、役場が区長への挨拶、地区への紹介をしてくれる。

目的別滞在タイプ

type C どっぷり、田舎暮らし

空家バンク

団塊の世代を中心に広がりつつある田舎暮らし願望。関西の都心部から車や電車で2~3時間圏内の川上村には「定年後はのんびり畑でもやりながら暮らしたい」という問い合わせが多い。「しかし、ある程度の村の仕事にも参加してもらいたい」と役場は言う。それは、掃除や草刈り、葬式の手伝いといったコミュニティに根ざした活動だ。つまり、「家を借りている都

市の人」ではなく、共に川上村に住む「村民」としての生活を望んでいる。1年を通じて村で生活をして欲しいというのはそのためだ。また、民家は長く人が住んでいなかった物件が多く、修理や補強などが必要になる場合もある。これは入居者が負担する。それぞれの家で状態が違うため、各自が責任を持って入居してもらいたい。



data

奈良県吉野の南東、三重県との県境に位置する500年前から林業で栄えた村。付近の山には吉野杉が見事に植林されている。吉野川流域には多くのキャンプ場や釣り場があり、夏になるとたくさんの観光客が訪れる。
●人口…3,814人/世帯数…1,067世帯(2006年6月30日現在)



22

町そのものが「エコ・ミュージアム」、 鳥取県智頭町

とっとりけん・ちづちょう

鳥取市から国道53号線をしばらく走ると、目の前に見事な杉山が現われる。その景色は、智頭町からの歓迎の印し。

林業で発展してきた智頭町は、町面積の93%が山林。形の揃った緑の杉の木が、美しい風景を描いている。美しいのは、山林だけではない。透き通った川は、キラキラと太陽の光を反射させ、綺麗な川底を覗かせる。この地域の川が水と共に砂を運び、鳥取砂丘まで辿り着くという。ここは、鳥取砂丘の源流なのだ。

智頭町には89の集落があり、それぞ

れが魅力的な顔を持つ。例えば、文化財『石谷家住宅』や全国にファンを持つ『諏訪酒造』などが並び、軒先に杉玉が飾られている「智頭宿」の町並みは、凛とした和のテイストとどこかモダンな雰囲気が漂う。また、県の伝統的建造物群保存地区「板井原集落」では、時間が昭和30年代で止まっているかのような感覚になる。水車で精米し、かまどで炊いたご飯をいただき、ギャラリーもあるカフェで静かに景色と戯れる。とても贅沢な、日本の生活。この町は、本物の「エコ・ミュージアム」、生活そのものが「博物館」だ。

各集落の良さが現在も息付いているのは、智頭町を大切に想う地域の人々による村おこしの成果だろう。高齢化が進む新田集落では、NPO法人として集落全戸が会員となり、平成3年より大阪いずみ市民生協との交流を始め、農林業体験を通しふれあいを続けている。美しい棚田風景を前に、新田集落自治会長の岡田一さんはこう言う。「15年間むらおこし事業をしてきたけど、都市との交流は楽しい。長期体験滞在して、新田に家を建てたいと言っている人もいますよ」。そう言った時の岡田さんの表情は、嬉しそうで穏や

「交流居住」施策の概要

NPO法人『新田むらづくり運営委員会』では、平成3年より大阪いずみ市民生協との交流を契機に、体験交流事業を行っている。子どもたちの健やかな成長と地元の人との交流を目的とした『田んぼの学校』や、伝統芸能「人形浄瑠璃芝居」を守る『新田人形浄瑠璃の館』の運営、さらに異文化と触れるために『新田カルチャー講座』を定期的で開催するなど、集落ぐるみで活性化に取り組んでいる。さらに交流を深めるために、村営宿泊施設も完備。

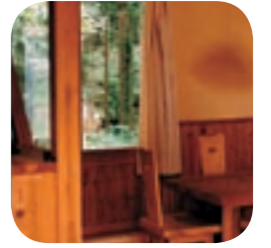
目的別滞在タイプ

type A 「ちよこつと、田舎暮らし

短期滞在型

『新田むらづくり運営委員会』が管理・運営している、ロッジ『とんぼの見える家』が保有する3棟のロッジのうちの1棟『かえで』は、1泊より民泊施設として利用できる。清潔なキッチン、バス、トイレはもちろん完備。広いリビ

ングには木目調の優しい家具が揃い、窓の外には棚田風景を臨める。2階も寝室も十分な広さのため、家族単位や友人たちと宿泊することもできる。テラスでバーベキューを楽しむ人もいる。1泊1棟10,500円+(人数×1,050円)。



type B 「のんびり、田舎暮らし

農業体験事業・長期滞在型

ロッジ『とんぼの見える家』の1棟+10m×10m農地を年間貸し出ししている。深い緑の山の麓、ゆったりした時間の流れの中で生活できる。都会で体調を崩していた人が訪れ良くなったというケースもある。条件は、村のイベントに

参加すること、生活用品は町内で調達すること。地元の人と交流しながら、新田での生活を体験する。これをきっかけに、実際に周辺の古民家を購入し週末利用している人もいる。年間契約50万円。



かだった。

新田の他にも、町全体の取り組みとして、各集落がそれぞれ一つの特徴(例えば「花の集落」「交流の集落」など)を掘り起こし、外へ発信することで村の誇りを大切にする『日本1/0村おこし運動』がある。無(0)から有(1)へのプロセスを歩むということ。美しい自然や伝統ある環境を誇り高く想う気持ちが、町全体をミュージアムとして大切にする行動へと繋がっているのだろう。

本物の自然の風景と、安らぎと、大地の味が集結している、芦津地区にあ

る山菜料理『みたき園』の女将が、曇りのない健やかな笑顔でこう言っていた。「ここに暮らしていると、四季が待ち遠しいの。生きてる！、って思うのよ」。

この時の女将と同じように、智頭町で会う人の笑顔は皆、満ち足りているように感じる。それは、「エコ・ミュージアム」の町で、美しい風景と空気と水と共に生きているからかもしれない。清らかで生き生きとした心が、根付いている。

data

鳥取県の東南に位置し、岡山県に接する県境地帯。周囲は1000m級の中国山脈が連なり、山峡を縫って流れる川が合流し日本海へと繋がる。町面積の93%が山林。古くは山陰と関西山陽を結ぶ宿場町として栄えた。

●人口…8,870人(2006年6月現在)



23

恵み豊かな、ふるさとへ

島根県 (財)ふるさと島根定住財団

しまねけん・ざいだんほうじん・ふるさとしまねていじゅうざいだん

日本海、神社、温泉、山林、文化遺産…。島根県を語るには、一言では言い表せない。それぞれの地域が各々誇れる魅力を持っている。

太古の時代より栄えた島根県は、大きく分けて2つの地方に分かれる。一つは「出雲地方」。国宝の神殿を持つ出雲大社は、島根県を代表する名所。神社建築様式の中で最も古い大社造りは、圧倒的なスケールを保ちながらも凛とした姿で訪れる者を迎えている。その他、多くの遺跡や松江市には気候や時間により表情を変える美しい宍道湖もある。日本の四季の美しさを、改め

て教えてくれる。

そして「石見地方」は、かつて幕府の天領として栄華を極めた石見銀山をはじめ、山陰地方の様々な自然を堪能できる。焼き物や神楽などの伝統も多く残り、体験できる施設も充実。海に面した石見海浜公園内にある、中四国地方最大規模を誇る水族館『しまね海洋館アクアス』は、人気スポットだ。「ずっと島根に住んでいても、まだまだ知らない事がある。地方によって特徴が違うから。だから面白いんですよ」と、松江市の人が言っていた。確かに、その言葉の通りなのだろう。一言では

語れない魅力があるのだ。

日本海や、いわゆる「日本の田舎、地域からの恵みを^{さんさん}燦々と受け、各地域がその特徴を伸び伸びと活かしている。それはきっと、恵み豊かな島根県をかけがえのない自分たちのふるさとにしようとする、地域の人々の力が集結しているから。そして実際、島根県を自分のふるさとにしようと、UIターンする人も多くみられる。それをしっかりとサポートしているのが、『ふるさと島根定住財団』である。

「UIターン」や「田舎暮らし」という言葉の響きに夢は膨らむかもしれない

「交流居住」施策の概要

『(財)ふるさと島根定住財団』は、平成4年に発足。UIターン希望者を対象にした産業体験への助成や、産業体験者の月家賃が2万円を越える場合、2万円を上限とする助成制度もある。また住まい支援として、市町村等が主体となって行う空き家の修繕費用を一部助成。UIターン者が島根県内で円滑に就職できるよう求人情報をはじめ、定住情報を提供している。パンフレットやネットで公開されている過去のUIターン事例は、とても参考になる。そしてUIターン者の意見交換の場として『定住塾』を年6回程度開催。意見交換や情報提供をすることで交流を深めることができる。

目的別滞在タイプ

type A 「ちよこつと、田舎暮らし

しまね暮らし体験事業

田舎暮らしを具体的に考えているUIターン希望者を対象に、各地域が様々な体験ツアーを実施している。地域体験や地元住民、先輩UIターン者との交流を行える2泊程

のツアーが多い。定住を考えている人を対象としたツアーに対して、実施グループへ必要な経費の一部を助成している。このツアーをきっかけに定住している例もある。



type B 「のんびり、田舎暮らし

UIターンのための島根の産業体験事業

県外在住のUIターン希望者が受け入れ先で一定期間、産業体験を行う場合、本人に対して月5万円の助成をしている。助成期間は、3ヶ月以上1年以内。農業、畜産、林業、漁業、伝統工芸、酒造など受け入れ先は幅広い。また体験指

導を行う受け入れ先には体験者1人につき月2万円の助成、さらに中学生以下の子ども同伴で産業体験を行う世帯へ月3万円を助成。技術の習得はもちろん、地域の人との交流や実際の暮らしを体験できる。



が、実際定住するとなると現実的な課題はある。例えば、生計をどう立てていくのか。どんな産業に携われるのか。空き家を借りることができるのか。地域にはどんな風習があるのか。馴染めるのか。『ふるさと島根定住財団』は、産業体験者や親子連れUIターン者への情報提供や助成金制度、また参加する側だけでなく地元の受け入れ側に対する助成を行うなど、心強い実際的なサポートをしている。

そして海も山も田舎もある環境ゆえ産業体験受け入れ先が幅広く、何より地元の人の受け入れ姿勢が柔らかい。

財団の定住支援課長・前田秀典さんはこう言う。「島根以外に幾つか住みましたが、島根の人は優しい。一度地域の仲間に入ると、仲良くしてくれるんですよ」。

豊かな環境がもたらす恵みの中、自分の「ふるさと」を探す——。島根県でなら、夢で終わらず現実のものにできることだろう。

data

中国地方の北部に位置し、東は鳥取に接し京阪神地方に通じ、西は山口県を挟んで九州地方に、南は中国山地をへだて広島県に接し、北は日本海に臨んでいる。島根半島の北方には隠岐諸島がある。面積は6,707km²。宍道湖は周囲約45km、面積は約80km²あり全国7番目の大きさを誇る。

●人口…5742,135人(2005年6月現在)



24

人間の暮らしが、ここにある 島根県江津市

しまねけん・ごうつし

日本海に背を向け、江津市内より内陸へ向かう。源流の広島側より江津市を経て日本海へと注いでいる、中国地方最大の河川『江ノ川』が、悠々とした姿で山地まで案内してくれる。すると目に飛び込んでくるのは、様々な木々が伸び伸びと生い茂る山あい抱かれるように建つ、赤茶色の屋根。日本最高級と言われる『石州瓦』だ。この光景は、ここ石見地方独特のもの。「山の懐に抱かれて、ってフレーズがあるけど、ここに来た時『まさにこれだ、って思ったの』江津市桜江町で、NPO法人『結ま

るプラス』の理事長かわべまゆみさんは、目を輝かせながらそう語る。かわべさん自身、ご主人の実家である桜江町に都心からIターンした。当初は「仕事は東京、生活は江津」というスタンスだったという。そのうち、マーケティングプランナーとしての血が騒ぎ出したのか、雄大な自然に抱かれながら桜江町で暮らすうちに、ツアーやイベントを行いたいと思うようになった。「季節によって楽しみや遊びが変わる。サーフィンもできるし、温泉もあるし、30分も行けばスキーもできる。夏なん

て丸2日間シーカヤックで遊びました。本当に楽しい。それに、広島市までたった1時間。実際住んで思ったんです。『同じ日本人が、こんな良い所を知らないのはもったいない、って』現在は、田舎暮らしを考えている人を対象にした『田舎暮らしツアー』や、伝統芸能や郷土料理などの地域資源を活かした体験交流を行っている。町内にある温泉リゾート施設『風の国』に滞在しながら、伝統工芸・産業体験ができるプログラムもある。また、集落にある空き家を放置せず利用するため、UIターン希望者へ『空き家巡りツ

「交流居住」施策の概要

NPO法人『結まるプラス』は、地元の無人駅「川戸」駅の舎内に開設された桜江サロンを拠点にし活動。様々な体験ツアーのほか、空き家を巡るツアーを実施。その空き家に滞在して田舎暮らしを体験できるプログラムを計画。単にUIターン者の増加を目指すのではなく、地元の人とUIターン者が同じ志を持ち、地域を守っていけるよう、バランスを保ちながら活動している。また、UIターン者の有志が町を盛り上げようと『スローマーケット』などのイベントや、毎月1回『風の国』で特産市を開催。地域の様々な団体が特産品を出品し交流を図っている。

目的別滞在タイプ

type A 『ちよこつと、田舎暮らし

田舎暮らし体験ツアー

田舎暮らしに興味がある都市住民に、低料金で田舎の魅力を満喫してもらおう2泊3日程度のツアー。江ノ川でのシーカヤックや、特産のごぼう郷土料理を体験するツア

ーを開催。冬はスキーなど、季節によってメニューは様々。『空き家巡りツアー』も実施。田舎暮らしツアーに参加したことがきっかけとなり、定住してきた人も多い。



type E 田舎で学んでお手伝い

体験交流事業

石見地方の代表的な伝統芸能である『石見神楽』。煌びやかな衣装を纏い勇壮と舞うことで、神々の物語を再現するもの。毎年秋祭り当日は、夜を徹して舞いが披露さ

れる。この伝統芸能・神楽の特訓を受け、習い、地元の秋祭りで実際に舞いを披露するツアーを実施している。



ツアー』も実施。

Iターンした江津市役所に勤める森脇龍一郎さんも、こう言っていた。「山奥に住んでいる義父母は、メダカを取ったり餌をしたりして元気に過ごしている。地元の人には、ここの暮らしを楽しんでいます。江津市は元々災害が少ない。そして、春の訪れを若葉の香りが伝える程、四季をはっきりと感ずることができる。溢れんばかりのホテルに出合えるのも、ありのままの姿の自然があるからだろう。

「天気や自然と繋がっていると感じる

んです。ここは、極上の田舎。まだまだ可能性を秘めているし、夢が詰まっている。人間の本来の暮らしがあります」そんなかわべさんの言葉を受け、江ノ川に沿った山間の道を走ると、深い山間の上に架かった霧は神秘的で、ここが日本ということを一瞬忘れてしまう。目の前には、海へと注ぐ大らかな川。そして、胸いっぱいおいしい空気を吸い込む。確かに、その言葉は本物だ。

data
島根県の中心部よりやや西側に位置し、中央を江ノ川が流れる。面積268.51km²。日本海ごぼう、桑の生産が盛ん。温暖気候で北九州気候区に属する。江津市中心地には、閑静な赤瓦の家並みが残る「江津本町堂街道」がある。
●人口…28,217人/世帯数…8,197世帯(2006年6月末)
●交通…出雲市、益田市、広島市から、それぞれ2時間以内で到着する



25

「陸の孤島」から、「人の行き交う港」のような村へ 徳島県美波町伊座利

とくしまけん・みなみちよう・いざり

徳島市から車で約1時間半。美波町は、徳島県の南、太平洋に弓状に面する海辺の町。平成18年に、日和佐町と由岐町が合併して誕生した。その東端に位置し、三方を山に囲まれた小さな漁村集落、伊座利は、昭和40年に道路が整備され、県南の中心・阿南市から車で約40分の距離になったが、かつては険しい山道を通って峠を越えるしかなく、「陸の孤島」と言われる場所だった。

400人ほどだった人口は100人を割り、伊座利校（伊座利小学校・由岐中学校伊座利分校の総称）の生徒は最小5人

まで減少した時期もある。学校閉鎖の声が上がり、危機感を持った住民たちは行政の手を借りずに立ち上がった。それが交流事業の始まりだ。

平成11年より、県内外の子どもたちに一日漁村留学体験をしてもらう『おいでよ海の学校へ』を開催。その成果として、現在生徒数は21人、短期留学を含め、転入生は40人を越えた。今では移住希望者も絶えない。

食物アレルギーの息子を持つ主婦の長野美和子さんは、家族4人で京都から移住してきた。「都会の学校では、先生に面倒を見きれないと言われました。

それで、全国の小さい学校をいくつか見て回ったんですけど、伊座利が一番、人が良かった」。地域住民全員が気にかけてくれる伊座利で、息子さんは回復の兆しを見せている。そして、長野さんの夫はせっかく仕事を辞めて来たのだから「伊座利の中で働きたい」と、新しく力を入れ始めた特産物・海草アラメの加工工場で働き、地域活性化に貢献している。

また「交流、という言葉の本当の意味は、人や物、情報などが行き来すること。都会から来る人を受け入れるだけじゃなく、私たちが積極的に外

「交流居住」施策の概要

平成12年に『伊座利の未来を考える推進協議会』を発足。行政にほとんど頼ることなく、住民全員が役割分担をして活動しているのが特徴だ。「集落単位で活動し、地域全体が受け入れ態勢のある町は他にはなかなかないと思います」と坂口さん。「学校の灯を消すな」を合言葉に、小中学生とその保護者を対象として行われている交流促進イベント『おいでよ海の学校へ』は夏冬年2回開催。転入の際には「子どもは親の愛情をたっぷり受けながら、一緒に暮らすのが一番」と、保護者同伴を勧めている。地元出身者を中心にかつて伊座利を訪れたことのある人たちも集まって、関西、東京、徳島市内などに『伊座利の未来を考える応援団』（団員数約600名）がある。

目的別滞在タイプ

type A ちよこつと、田舎暮らし

1日漁村体験

伊座利沖にある「大敷網」という定置網漁業が体験できる。そのほか、季節によって磯釣り、イセエビ網、イカ釣りなども行える。カヌーやクルージング体験もある。

親子で参加できる1日漁村留学もあり、夏と冬に年1回行われている。その他に、磯あそび、いかだあそび、伝馬船体験、テナガエビ獲り体験など。



type B のんびり、田舎暮らし

にぎわいの館

交流施設『にぎわいの館』（バス・水洗トイレ・キッチン付／1泊3000円）で長期滞在ができる。この他に、イザリーノ・キャンプ場（1泊素泊まり2000円／オーダーすれば地元民が海の幸の食事を提供し

てくれる）もある。様々な問題を抱えた子供たちの留学制度も盛んに行われ、期間は個々に相談。現在、9世帯が全国各地から移住している。



へ出て行って交流したい」というのは、『伊座利の未来を考える推進協議会』の坂口進さん。東京、大阪、徳島中心部などで伊座利のPR活動も行っている。そこには住民の半数以上である70人が参加した。

「交流をキーワードに活動していく中で、一番驚いたのは、伊座利で育った若い子たちが、都会へ出て行かず、ここに残るようになったことです」

地域一丸となって活動し、いつの間にか地元民の意識も変わっていた。そして今年、13年ぶりに、伊座利で子供が生まれたそうだ。

来年3月、新たな交流居住の施設を新設する。2階が貸しコンドミニアム、1階は地域の海産物を素材にした料理を提供する『漁村カフェ』をオープンする予定だ。「おいしいコーヒーとうまいアワビ入りカレーが食べられるカフェです。そこが、他の地域から来た人と地元民のたまり場となって、新しい交流の場になったら嬉しいですね」。

地域全体が一大家族のような団結力を見せ、温かい眼差しとパワフルさを持つ伊座利の人々。外からの刺激も大いに受けながら、海のように大きく深い心を育てていく。

data

徳島県の南、美波町の東端に位置し、入り組んだ海岸線と三方を山に囲まれている。気候は通年暖かい。山が直接海に迫り、平地がほとんどないため、漁業が中心。アワビ、サザエ、イセエビ、タチウオ、ブリなど多種多様を漁獲。JR徳島駅から車で120分。
●人口…123人／世帯数…50世帯（2006年4月1日現在）



26

四万十川のほとりで、豊かな創造力を育む 高知県四万十市 こうちけん・しまんとし

四万十市は、その名の通り「最後の清流」と呼ばれる四万十川の周りに広がっている。平成17年に中村市と西土佐村が合併してできた。この中にある西土佐地区は、市の中心部から車で約1時間。四万十川に沿って続く清々しい国道をゆるやかに登った山間にある。

この地域は、かつては林業でかなりの収益を上げていたが、山の荒廃が進み、現在は農業が中心となっている。山師の後継者がいないのも問題だ。現在活躍しているのは60、70代の方たちばかり。「農業も林業もすぐに身に付く

技術ではありません。誰かが残して行かなければいけないことを交流事業によって肌で感じてもらいたい」と、西土佐総合支所産業課の中脇裕美さんは語る。

そんな中、平成11年に廃校舎を活かした交流宿泊施設『四万十楽舎』が生まれた。いち早く廃校舎の活用を行い、県内でグリーン・ツーリズムの先駆けとなった場所である。四万十川のほとりにあるこの施設には、今では年間約2,500人が訪れる。

四万十楽舎の事務局長を務める大高達人さんは、「山に囲まれた生活がし

たい」という思いから、施設の立ち上げに関わるため、まったく縁のなかったこの地へ単身移住してきた。単なる宿泊事業だけでなく、地域活性のために木工工芸の開発など様々な展開を考えている。地元民の代表者として交流事業に取り組む中脇さんと手を取り合い、まずは地域内での交流に対する意識を高めることを目指している。

先頃、四万十楽舎が主催となって『地域の食べ物100品目試食会』が行われた。伝統料理を見直そうというこの会には、地域民が多数集まり、新たな世代の結びつきや対話が生まれた。「田

「交流居住」施策の概要

社団法人である体験型宿泊施設『四万十楽舎』が中心となり、生涯学習事業、地域活性化研究事業を行っている。「宿泊事業がメインですが、今までの観光というスタイルから、交流へ結びつくような体験をしてもらうことを重視しています。四万十川という全国的にも知られている地域なので、もっと川遊びなどで、経済効果が生める展開を考えていきたい」と事務局長の大高達人さんは語る。川遊びの他には、現在、雑木を有効活用した木工製品の売り出しに力を入れている。

目的別滞在タイプ

type A 「ちよこつと、田舎暮らし

体験ゼミナール

半日、1日のプログラムで自然体験ができる。里小屋づくり（カット）、農林漁業体験、森林散策、イカダ下り、竹細工・かずら工芸、木工工芸など。また、結婚式や銀

婚式の記念日に四万十川の沈下橋や川船、カヌーなどを利用し、四万十川を舞台としたセレモニーを行うこともできる。



type B 「のんびり、田舎暮らし

四万十楽舎

廃校舎を再活用した体験型宿泊施設『四万十楽舎』1泊6,800円（食事付）、素泊まり4,700円。修学旅行やグループ旅行で訪れる人も多

い。四万十川の自然を思う存分体験してもらう自然文化体験や、地元の名人を講師に農林漁業と一緒に体験することができる。



舎の味を提供してもらう地域の人たちを直接たずねて頼み込んだことで、地域住民との関わりがものすごく増えました」と大高さんは嬉しそうに語る。

以前は、地域住民の間で「交流は必要ない」という声も多かったが、ここ数年で「歓迎する」という意見が増えてきた。そして、この5、6年で、20人以上もの移住者を迎えた。彼らを受け入れることで、地元民もこの地の良さを再確認し始めている。

「僕自身、もっと山村って閉鎖的なかと思っていたけど、全然そんなことはなかった。高知はもともと、すごく

開放的な土地柄なんです。だからもっと交流によって、都会から来る人たち、地方に田舎を持たない人たちが、第二の故郷と思えるようになって、地域住民が、ここに孫を迎えるような雰囲気

が生まれるといいなと思っています」
今後は、今も増え続ける廃校舎をもっと有効活用し、アトリエを作る構想もある。地元民である中脇さんと移住者である大高さんが中心となることで、双方の意見を取り入れながら、画期的なアイデアが生まれていく。美しく揺らめく四万十川を臨むこの場所は、新たな感性を磨くのにも最適だ。

data
高知県の西南に位置する山に囲まれた町。盆地のため、冬は寒く夏は暑い、昼夜の温度差があり食物は何でも美味しく育つ。四万十川がすぐ近くにあり、水の綺麗さは群を抜いている。米ナス、ししとう、オクラ、苺などの農産品や、山の幸が豊富。
●人口…37,783人／世帯数…15,959世帯（2006年4月1日現在）



27

「安心院方式」でグリーンツーリズムを。 大分県宇佐市安心院町

おおいたけん・うさし・あじむまち

その昔、盆地湖だった場所が徐々に干潟となり、芦が生えてきたことから芦生の里と呼ばれ、これが「あじむ」に転化したのが今の地名の由来とされる安心院町。由布岳から連なる山々に囲まれた盆地の町は、温暖な気候と農業、そして国指定無形文化財の『鍔絵』が自慢。鍔絵とは土蔵や家の壁に龍や恵比寿様、鯛などの絵柄を、白壁の漆喰が生乾きの時、一気に仕上げる非常に珍しい民衆芸術。特に安心院の鍔絵は明治初期から描かれ始め、子孫繁栄の願いを込めた「ブドウ、や外法（福祿寿）の散髪姿を描いた「外法

の梯子剃り、というユーモラスな絵柄が特徴的。町内のいたる場所の民家や蔵の壁に残されており、現存では日本一を誇る枚数がある。

のどかな風景が広がる安心院の町は、農業が主な産業。稲作は大分県のお米『安心院ひのひかり』を主に栽培している。果実は糖度が高いピオーネやデラウェア、赤ワインの原料にもなるマスカットベリーAなど、西日本有数のブドウ大国を誇る安心院ならではの多彩な品種が栽培されている。そんな安心院町が全国に先駆けて取り組んだグリーンツーリズムの一環『会員制農

村民泊』の実践者のひとり、時枝美佐子さんはこう語る。「この町は何もない農業地帯。でも食べ物は本当においしいし、それぞれの家庭には代々続く味もある。だからこそ、うわべだけのおもてなしではなく、この土地や人の魅力を活かした自然体のおもてなしをしたい。〓〓さんいらっしゃい、ではなく〓〓さんお帰りなさい、と言えるような、顔が見える関係ができればいいですね。」

「米作中心の農業をしてきたこの町にとって、米価の低迷や過疎・高齢化が深刻な問題でした。そこで、農産物を

「交流居住」施策の概要

平成8年、『安心院町グリーンツーリズム研究会』が結成され活発な活動を行う。また、平成13年には全国初の『グリーンツーリズム推進係』を行政機構に設置、官民協働の推進体制を整備した。教育に配慮した取り組みも積極的で、不登校の子どもを農家で預かったり、都市部の大学ゼミ生の受け皿づくりにも余念がない。特に『会員制農村民泊』が特徴的で、普通の民家に宿泊・農業体験をしてもらうアイデアが地域内外からも高く評価されている。最初は全国でも前例のなかった安心院町民と町行政による手作りグリーンツーリズムが、「安心院方式」として次第に評価され、県も農泊の規制緩和措置を打ち出し、遂には国の旅館業法緩和措置につながるなど、日本のグリーンツーリズム推進に与えた影響は非常に大きい。

目的別滞在タイプ

type A 〓ちよこっと、田舎暮らし

会員制農村民泊

農村の民家に宿泊し、食事など全ての時間を泊まった家庭の人とともに過ごすことが基本。受け入れ側は田舎で親戚を迎える気持ちで接しているため、民宿ともまた違った経験ができるのが最大の特徴。会員制のメンバーズカードがあり、

1回宿泊するごとに1個スタンプを押してもらい、最初は〓遠い親戚、10回泊まると〓本物の親戚、として認定される仕組み。パンフレットには受け入れ先がその家の特徴と共に明記されており、訪問者も選びやすい。



type E 田舎で学んでお手伝い

大分・安心院 グリーンツーリズム実践大学

グリーンツーリズムの担い手育成と、地域への普及を目的に設立。地域にある〓食と農泊を中心に、山・川・海・村すべてを大学のフィールドとし、講師と地元の実践者を迎え、体験を持って学ぶ場。4月入学で12月卒業。入学金10,000

円、受講料200,000円。農村民泊は必須で、1つの家庭の研修は2週間以内。通常の講義のほか、安心院にある大分県水面研究所をはじめ、大分県農業技術センター、ワイナリーや豆乳工場などの視察研修もある。



売だけではなく、人の魅力を育てアピールしていこうという町全体の取り組みを始めたことが功を奏し、今の官民一体の農村民泊につながったのです」と語るのは安心院支所商工観光課の河野洋一さん。また、福岡の職場を辞め、安心院町からグリーンツーリズムを広めていこう、と2年前に町に移住してきたグリーンツーリズム研究会の植田淳子さんは「若い人にもっと田舎の良さを知って欲しい。特に安心院はおおらかで開放的な人の魅力が素晴らしいと思う」と話してくれた。

町のもうひとつの名物、スッポン料

理を出すお店に入ると、突然「グリーンツーリズムの取材ですか？」と声をかけられた。町民自ら意識し、人々との交流を求める町、安心院町。ヨーロッパでは、〓市民が人間性を取り戻すため、に行われる、農村での余暇活動としてのグリーンツーリズムが、日本のこの山奥で根づいている素晴らしい、受け入れ側も旅行者にとっても、体感することで本物となる。

data

温暖な気候と、温泉、町そのものが自然体験できるふるさととして、農村民泊がメインとなる宿泊客にはリピーターも多い。その昔は湖だったという、大分県北部に位置する盆地が主な居住地。農業が盛んで、稲作のほか、ブドウの生産量は西日本有数であり、清流にしか生息しないスッポンも有名。また、安心院葡萄酒工房やアフリカンサファリなどの観光客向け施設にも力を入れている。

●人口…7,708人／世帯数…2,954(2005年3月31日現在)

●交通…大分空港より車で大分空港通りへ。速見ICから宇佐別府道路を利用、安心院ICで降りる



28

生活型観光地、それが湯布院。 大分県由布市湯布院町

おおいたけん・ゆふし・ゆふいんちょう

大分空港からバスでゆられること約55分。湯布院町へ向かう最後の坂を下るバスの窓からは、なだらかな緑の斜面が大きく広がり、『豊後富士』と呼ばれる由布岳が見える。

1300年ほど前、奈良時代に編纂された豊後風土記の中にこのあたりの土地を表す言葉として「柚富郷」という名が書かれており、ゆふいんの名の始めとされる。平安時代には稲などの租税を収蔵する蔵院が柚富郷に設置されて以来、「ゆふの院」などと呼ばれるようになったのが地名の由来。そして1955年に湯平村と由布院町の、2つの町村

が合併した際、湯平の「湯」と由布院の「布院」を合わせて「湯布院町」となった。

ほとんどの一般家庭で使用される生活温水も温泉というほどの、贅沢な湯量を誇る湯布院町。町がこんなにも有名な観光地となったのは、1975年の大分中部地震以降の取り組みから。それまではひなびた小規模の温泉地であったのが、地震をきっかけに町を復興させようと、辻馬車を走らせたり、音楽祭や映画祭の企画を立ち上げ、徐々に知名度が上がり、土地の持ついい味を活かし始めた。

「湯布院は出会いが多い町。ただの田舎でも観光地でもない。都会の人でも刺激的な場所です」とは、由布院観光総合事務所事務局長の米田誠司さん。以前は東京都の職員であったが、今の職場で役職を公募していたことをきっかけに移住したIターン者のひとり。

町の人々は明るく開放的で、お祭りの準備やボランティアなど何事にも積極的な姿も移住決定のひとつの要因だったという。「人が魅力ということもあって、観光客の65%はリピーターなのです。おもてなしの心をもった、個性豊かな町民が多いですね」。

「交流居住」施策の概要

全国でも屈指の温泉地として有名であるため、観光目的で1泊や2泊の短期滞在をする人々が多いが近年滞在日数も伸びていると聞く。また、『湯布院映画祭』や『ゆふいん音楽祭』などのイベントも盛んであるため、実行委員会スタッフが市外からボランティアで滞在するケースも多い。また最近では、従来の保養温泉地や文化の香るまちの観点から、趣味や実益を活かした喫茶店の開業、芸術家、音楽家など「ほぼ定住型」どっぷり、田舎暮らし」を実践する移住者が増加しつつある。団体として移住を誘導する施策を行っているわけではないが、都市住民に向けて湯布院の「ひと」や「まち」をアピールすることが、移住のきっかけにつながっていると考えている。

目的別滞在タイプ

type A “ちよこつと、田舎暮らし

文化的イベント

数多いイベントが特徴。『ゆふいん音楽祭』、『湯布院映画祭』など、全国的にも有名な文化的イベントを始め、辻馬車開きや温泉まつり、盆地まつりなど、温泉観光地というメリットに甘んずることなく、積極的にイベントを催し、人々と交流をはかっている。観光客は日

帰り、又は1～3泊の滞在が主となり、170軒ほどもある宿泊施設で対応している。外国からは行政の視察も含めて韓国からの訪問が1番多いが、遠くはカナダ、イギリスからの旅行者も見受けられる。



type C “どっぷり、田舎暮らし

Iターン

行政や市民団体などが特別にIターン者の受け入れ活動のための積極的な取り組みは行っていないが、イベントや観光がきっかけで移住を決めた市民は増加しつつある。音楽祭や映画祭、食文化フェアなど市内外の人を呼び込むことができるイベントを行っていることも

あり、また、画家や音楽家などのアーティストにも定住者が多いのが特徴。街の人々も開放的で、すぐに仲良くなれるのも魅力のひとつ。交通機関は列車、路線バス、大分空港、福岡空港までの高速バスなど。



日常的に通う銭湯まで様々なタイプが混在している。

個性豊かな町民が、訪れる人を選ばない、千差万別のおもてなしを感じてもらえるようにと、行き届いた配慮があちらこちらに自然と感じられる町、湯布院。年間で400万人弱の人が訪れるこの町は、観光客と町民の想いが溶け込み、温かい湯につかるような安心感と、おおらかさがある。

特に名物料理はない、と地元の人には言うが、「地産地消」（地元の生産物を地元で消費する）が合言葉の湯布院の料理は、地元で育てられた豊後ゆふいん牛、地鶏などの料理や、小麦粉を練って茹でたものに砂糖ときな粉をまぶした『やせうま』など、私たちが忘れていた素朴で味のあるものが多い。一方で、県外からも評判のおいしい食事でもてなすお店がいくつもあったり、温泉旅館も老舗で伝統のある旅館から、女性ファッション誌に取り上げられるようなモダンな要素をとり入れた高級旅館まで、温泉も露天風呂から町民が

data

大分県のほぼ中央、北東に豊後富士といわれる由布岳に抱かれた由布市湯布院町は、盆地が主な居住地となっている。盆地内はどこを掘削しても温泉が湧き出てくる贅沢な土地で、朝霧の名所としても知られている。主な産業は観光・サービス業と、それに次ぐ農業は稲作が盛ん。

●人口…11,488人／世帯数…4,963世帯（2006年7月現在）

●交通…大分空港より直行バスで約55分、車で50分ほど



29

カリコボーズの棲む村

宮崎県西米良村

みやざきけん・にしめらそん

宮崎空港から市内を抜けて車で2時間。東に一ツ瀬川、西に九州中央山地を始めとする雄大な山々を眺め、蛇行した道を上った先に現れてくるのが西米良村だ。山林と谷谷とのコントラストの風景は、時が止ったままの印象を受ける。村の96%が森林に囲まれ、人家や耕地は川や谷沿いに点在。「自然の中に人間が住まわせてもらっている」という感覚が、独特の山村文化と相互扶助の文化を形成していった。「地元では山の仕事をする場合、山の神に塩や米、焼酎などを供えて、山の仕事を成就させてください、と祈る習

慣があり、これを怠ると家をガタガタと揺すって驚かすことがあると言われている。自然を大切に警告しているのでしょうか」と、黒木定藏村長は語る。米良地方に古くから伝わる山や川の精霊であり、村のシンボルでもある『カリコボーズ』。この存在を信じる心が、「自然と共生していく村作り」を推進してきた。

それを感じさせるものとして、谷間にこだまする轟音が有名な『やまびこ花火大会』がある。役場の梅本昌成さんいわく、「この花火大会はとにかく音がすごい。周りの山々に花火がこだま

するさまは、まさに自然が奏でる音の花火大会ですよ。花火を「体感、できるので、視覚障害者の方にも好評です」。

さらにこの村には、『菊池氏の薫陶』という独特の文化が根付いている。これは、旧領主菊池氏から受け継いだ「礼節を重んじ、郷土を愛し、現実を直視し問題解決する」という精神。天然温泉が湧くこの村では、昔から誰がいうでもなく、自発的におじいちゃんやおばあちゃんと若者達が日替り無償の清掃を行う。黒木村長が「いつもありがとね」と声をかけると、「自分達の村をきれいにするのはあたりまえよ。あ

「交流居住」施策の概要

村づくりの基本コンセプトは、「菊池氏の薫陶・生涯現役元気村『カリコボーズの休暇村・米良の庄』」。交流により村の活性化に繋げる『西米良型ワーキングホリデー制度』と、村の魅力を最大限に生かすために物語性を持たせたプロジェクト『8つの庄建設プロジェクト』（まちづくりの庄、健康づくりの庄、湖遊びの庄、語り部の庄、花づくりの庄、川遊びの庄、匠の庄、交流・滞在の庄）の2つを柱として、地域作りを促進。「村民に無理がないように、気長にゆっくりと、取り組んでいきたい」と黒木村長。小さい村だからこそできる個性豊かな活動を大切にしている。

目的別滞在タイプ

type A ちよこつと、田舎暮らし

西米良型ワーキングホリデー

平成9年にスタートしたこの制度は、人手不足による農作業を手伝って報酬を得るとともに、村民との交流を深め、西米良村の良さを体験するもの。受入期間は、原則として休暇を含み3日から1週間以内としている。例えば1週間の

場合、4日間仕事を手伝い、残りの3日間は西米良村の豊かな自然の中で休暇を楽しむ。参加者は、時給610円の報酬を受け取るが、公設の滞在施設の利用料金や食事などの滞在費は個人負担。主な農作業は、ゆずと花卉の栽培と収穫。



type E 田舎で学んでお手伝い

平成の桃源郷・小川作小屋村

西米良固有の生活様式「作小屋」。山深く平地がないこの地では、集落と田畑とが離れていたため、日々の往来が困難だったことから、田畑の近くに作業小屋を作って繁忙期に暮らしたのが「作小屋」の始まり。作小屋を所有し今も生活を送る黒木敬介さんは、「正月やお

盆以外は、ほとんど作小屋で生活しています。ここでは農作業の他、味噌や醤油作りなど、生活に必要なものすべてを手作りしていますよ」と、その快適さを語る。昭和30年頃まで続いたこの生活様式をより多くの人に知ってもらおうと、小川地区に『作小屋村』を計画中。



りがとうはいらんと」と言って、82歳のおばあちゃんは早朝の掃除をする。子どもからおばあちゃんまで、村民すべてに「ここは自分達の村」という愛村心が宿っている。

この村の最大の魅力は、精霊を信じ、文化を重んじる日本特有の伝統的な村である一方で、閉鎖的ではないところにある。日本で初めて『ワーキングホリデー』の制度を導入したのは、実はこの西米良村。山村地帯に特有の通信網の問題も、山の上にアンテナを立てて、村中どこでも無線LANが使えるようにした。国土交通省の定める『観光

カリスマ100選』に黒木村長が選ばれるほど、革新的な村でもあるのだ。自然の素晴らしさだけに頼らず、個性的なアプローチで都市との交流を図っている。

『生涯現役元気村』をコンセプトに掲げる西米良村。若者だけでなく、高齢者も「現役として」社会に参加するからこそ、革新性だけでも愛村心だけでもない、「生きている村」となる。

data
宮崎県の中央部最西端、熊本県を境とした九州中央山地の中央に位置し、地形は急峻で、人家や耕地は谷沿いに点在している。交通網は、国道219号線と国道265号線があり、宮崎空港から車で2時間。現在は、県下最小の村となっている。
●人口…1,364人／世帯数…613世帯（2006年6月1日現在）



「やんばる」に咲く、豊かな笑顔 沖縄県東村 おきなわけん・ひがしそん

吸い込まれそうな青い空と海がどこまでも続く、沖縄県本島。都市化が進む那覇市内より車で約2時間のところに、「やんばる(山原)」と呼ばれる地域が広がる。そこに、パイナップル畑と透き通った海、青々と生い茂る緑豊かな東村がある。

近年は、ゴルファー宮里三兄弟の出身地として名が知られているものの、東村が観光事業に本格的に乗り出したのは、つい最近の平成10年のこと。県内パイナップル生産No.1を誇る「パイナップルの村」が観光や交流型農村に着目したのは、平成7年からスタートした山

形県八幡町(現・酒田市)との交流がきっかけとなった。

「最初は、事業に結びつくか分からなかった。でも、八幡町から来る子供達に村の良い所を見てほしい、という、もてなしのアイデアの一つが、カヌーだったんですよ。そう語る『やんばる自然塾』塾長・島袋徳和さんは、観光事業を東村に興した第一人者。亜熱帯の河口や内湾海岸に生息する貴重なマングローブ(ヒルギ)が雄々と茂る、東村慶佐次川をカヌーで下る「エコツアーリズム」を行っている。島袋さん自身、東村出身だがUターン経験者でも

ある。都会での暮らしを経験したことで、東村の良さを再確認し、客観的に見ることができているという。

「観光が進むと、自然が壊れてしまうことがよくある。でも自分達が主体性を持って、例えば受け入れの人数などをコントロールして本土から来てくれる人達を迎えれば、環境保全になる。『地域主体、というのは、必然です』

その言葉通り、東村への観光客や、交流で訪れる修学旅行生をはじめ来村者は年々増加しているにもかかわらず、「やんばる」の雄大な大自然は変わらない。そこには、観光事業や交流に関

「交流居住」施策の概要

カヌー体験、マングローブ林遊歩道ややんばるの森トレッキングなどの「エコツーリズム」、磯釣りや追い込み漁体験の「ブルーツーリズム」、そして地元農家に宿泊しての1日農業体験や半日農業体験「グリーン・ツーリズム」、さらに沖縄料理体験や方言講座、クラフト体験などの体験プログラム情報を、村商工会内に事務局を設け一括して提供している。行政が支えとなっているため、信頼度は高い。団体のみ参加できるプログラムが多いが、将来的には個人でも参加できる体制を目指している。

目的別滞在タイプ

type A 「ちよこつと、田舎暮らし

短期自然体験 エコツーリズム

沖縄本島最大のマングローブ群生が広がる慶佐次川をカヌーに乗って漕ったり、トレッキングなど、ガイドが付き東村の自然を肌で感じられるプログラム。所要時間1

～8時間とコースにより異なる。団体・個人共に受け付けている。満足度No.1はやはりカヌー体験。川から海まで出られるコースは、沖縄の真っ青な海と対面できる。



type E 田舎で学んでお手伝い

農作業体験 グリーン・ツーリズム

一度につき、大体20軒ほどの農家が受入先となり、県内外の修学旅行生が地元の人達と交流している。宿泊した翌日は各農家の農作業を体験する。パイナップル、パパイ

ヤ、マンゴーなどの作業が多い。学校側から要望があれば、地元の青年会がエイサー(伝統舞い)を披露する時もある。現在は、子供達の団体のみを受け入れている。



わる人をはじめ、村の大地の恵みを受けている東村の人々の、自然への想いが表れている。

東村では体験交流型として、自然体験「エコツーリズム」、漁業体験「ブルーツーリズム」、そして農業体験「グリーン・ツーリズム」を、行政が後楯となり、一つの窓口を設けて行っている。「家に泊まった学生のお父さん宛てに、泡盛を送る約束したんですよ」と笑いながら話す、東村助役・比嘉勝正さん。「グリーン・ツーリズム」では、地元の農家に修学旅行生が宿泊し、パイナップルなどの農業を体験している。今現

在は、修学旅行など、団体の子供を対象にしているが、年間2000人弱の子供達が東村の人々と交流をしている。

「やんばる」の大自然の中、豊かな笑顔を持つ東村の人々と、「花と水とパイナップルの村」東村の文化や想いを分かち合う体験は、きっと大らかな心と元氣をもたらえることだろう。

data

沖縄本島北部の東海岸にあり、東西に4～8km、南北に26kmで面積は81,79km²の細長い村。高江・宮城・川田・平良・慶佐次・有銘の6字で構成されている。県全体の3分の1はパイナップル生産。花栽培や熱帯果樹、観葉植物なども導入され、かつては林業だったが純農村へと変遷している。
●人口…1,961人/世帯数…783世帯(2002年調べ)

受け入れ窓口一覧 (掲載順)



01 北海道 — 17
株式会社北海道コンシェルジュ
tel 0138-23-0001/fax 0138-23-7600
hokkaido-concierge@kita-iju.com



02 北海道壮瞥町 — 19
総務課 企画調整係長 大野博雄
tel 0142-66-2121/fax 0142-66-7001
kikaku@town.sobetsu.hokkaido.jp



03 北海道由仁町 — 21
企画課 企画・広報広聴担当主査 納口浩昭
tel 0123-83-2111/fax 0123-83-3020
h-nouguchi@town.yuni.lg.jp



04 青森県南部町 — 23
農林課グリーン・ツーリズム推進室
主査 横山 悟
tel 0178-76-2111/fax 0178-76-2968
yokoyama-satoru@nanbu.net.pref.aomori.jp



05 宮城県丸森町 — 25
不動産ラインガルデン代表 菅野知光
tel & fax 0224-73-1150
http://www.02.jet.ne.jp/~fudonoen/index.html



06 山形県白鷹町 — 27
政策改革課 大木健一
tel 0238-85-2111/fax 0238-85-2128
k-oki@so.town.shirataka.yamagata.jp



07 福島県川俣町 — 29
産業課商工交流係 係長 橋本隆秀
tel 024-566-2111/fax 024-566-2438
sangyo@town.kawamata.lg.jp
http://www.town.kawamata.lg.jp/



08 福島県泉崎村 — 31
企画調整課 緑川利昭
tel 0248-53-2238/fax 0248-53-2958
kikaku@vill.izumizaki.fukushima.jp
http://www.vill.izumizaki.fukushima.jp/



09 群馬県川場村 — 33
むらづくり振興課むらづくり振興グループ
リーダー課長補佐 中村雅治
tel 0278-52-2111/fax 0278-52-2333
naka-ms@vill.kawaba.gunma.jp



10 千葉県NPO法人千葉自然学校 — 35
NPO法人『千葉自然学校』
ネットワーク事業部長 土居 元
tel & fax 0470-33-2693
jimukyoku@chiba-ns.net



11 新潟県上越市・十日町市 — 37
越後田舎体験推進協議会 事務局長 小林美佐子
tel 025-592-3988/fax 025-592-3324
taiken@yukidaruma.or.jp
http://www.yukidaruma.or.jp/taiken/



12 新潟県柏崎市高柳町 — 39
越後門出和紙 小林康生
tel 0257-41-2361/fax 0257-41-3024
k-washi@kisnet.or.jp
http://www.kisnet.or.jp/takayanagi/



13 新潟県魚沼市 — 41
魚沼市地域振興課地域づくり班 係長 仲丸晋
tel 025-792-9752/fax 025-793-1016
chiiki@city.uonuma.niigata.jp
http://www.city.uonuma.niigata.jp



14 山梨県北杜市 — 43
NPO法人『えがおつなげて』
代表理事 曾根原久司
tel 0551-35-4563/fax 0551-35-4564
inaka@athena.ocn.ne.jp
http://www.npo-egao.net



15 長野県飯田市 — 45
飯田市産業経済部農業課
農村振興係 池田善一
tel 0265-21-3217/fax 0265-52-6181
worholi@city.iida.nagano.jp



16 長野県飯山市 — 47
経済部商工観光課 観光係 高橋昇一
tel 0269-62-3111/fax 0269-62-6221
shoukan@city.iiyama.nagano.jp



17 愛知県豊根村 — 49
総務課 企画係 稲垣 淳
tel 0536-85-1311/fax 0536-85-1164
info@vill.toyone.lg.jp



18 兵庫県福知山市 — 51
農林部農村整備課 振興計画係 森川強志
tel 0773-22-6111/fax 0773-23-6537
keizai@city.fukuchiyama.kyoto.jp



19 京都府南丹市 — 53
南丹市役所美山支所 産業振興課
商工観光係 船越正一
tel 0771-68-0042/fax 0771-75-0801
funakoshi230@city.nantan.kyoto.jp



20 兵庫県朝来市 — 55
朝来市産業振興部 農業振興課 住吉哲雄
tel 079-672-2774/fax 079-672-3220
asago-chiiki@city.asago.hyogo.jp



21 奈良県川上村 — 57
企画財政課 主幹 中川雅偉
tel 0746-52-0111/fax 0746-52-0345
m-nakagawa@vill.nara-kawakami.lg.jp



22 鳥取県智頭町 — 59
NPO法人『新田むらづくり運営委員会』
新田集落自治会長 岡田 一
tel 0858-75-3280/fax 0858-75-3286
okadah@river.ocn.ne.jp



23 島根県(財)ふるさと島根定住財団 — 61
(財)ふるさと島根定住財団 定住支援課
tel 0852-28-0690/fax 0852-28-0692
http://www.teiju.or.jp



24 島根県江津市 — 63
総務部企画財政課 森脇龍一郎
tel 0855-52-2501/fax 0855-52-1380
kikakuzaisei@city.gotsu.lg.jp



25 徳島県美波町伊座利 — 65
伊座利の未来を考える推進協議会
坂口 進
tel 0884-78-1185/fax 0884-78-0512
http://izari.net/



26 高知県四万十市 — 67
(社)西土佐環境・文化センター 四万十楽舎 大高達人
tel 0880-54-1230/fax 0880-31-9788
http://www.netwave.or.jp/~gakusya/
四万十市西土佐総合支所産業課 中脇裕美
tel 0880-52-1111/fax 0880-52-2124



27 大分県宇佐市安心院町 — 69
宇佐市安心院支所 商工観光課
グリーンツーリズム推進係 係長 河野洋一
tel 0978-44-1111/fax 0978-44-2075
2green04@city.usa.oita.jp



28 大分県由布市湯布院町 — 71
環境商工観光部 商工観光課 高田信明
tel 0977-84-3111/fax 0977-84-3121
shoko@city.yufu.oita.jp
http://www.city.yufu.oita.jp/



29 宮崎県西米良村 — 73
総務企画課 企画財政グループ長
課長補佐 梅本昌成
tel 0983-36-1111/fax 0983-36-1207
ma-umemoto@vill.nishimera.lg.jp



30 沖縄県東村 — 75
東村観光推進協議会
観光コーディネーター 大嶺亮一
tel 0980-43-2931/fax 0980-43-2503
kanko-kyo@higasi.or.jp

そうだ、宝くじがある。

日常をはなれて大きな夢をみる、その心のゆとりがうれしいな。

宝くじの収益金は、
身近な街づくりに役立っています。

宝くじ



財団
法人

日本宝くじ協会

当せんはしっかり調べて、しっかり換金。

<http://www.takarakuji.nippon-net.ne.jp>

●外国発行の宝くじを、日本国内において購入することは、法律で禁止されています。

田舎暮らしのススメ [交流居住の先進自治体事例集]

発行…総務省自治行政局過疎対策室・財団法人過疎地域問題調査会 編集…ASOBOT レイアウト…文京図案室
お問い合わせ…財団法人過疎地域問題調査会 東京都港区虎ノ門1-13-5 第一天徳ビル3階 tel 03-3580-3070